





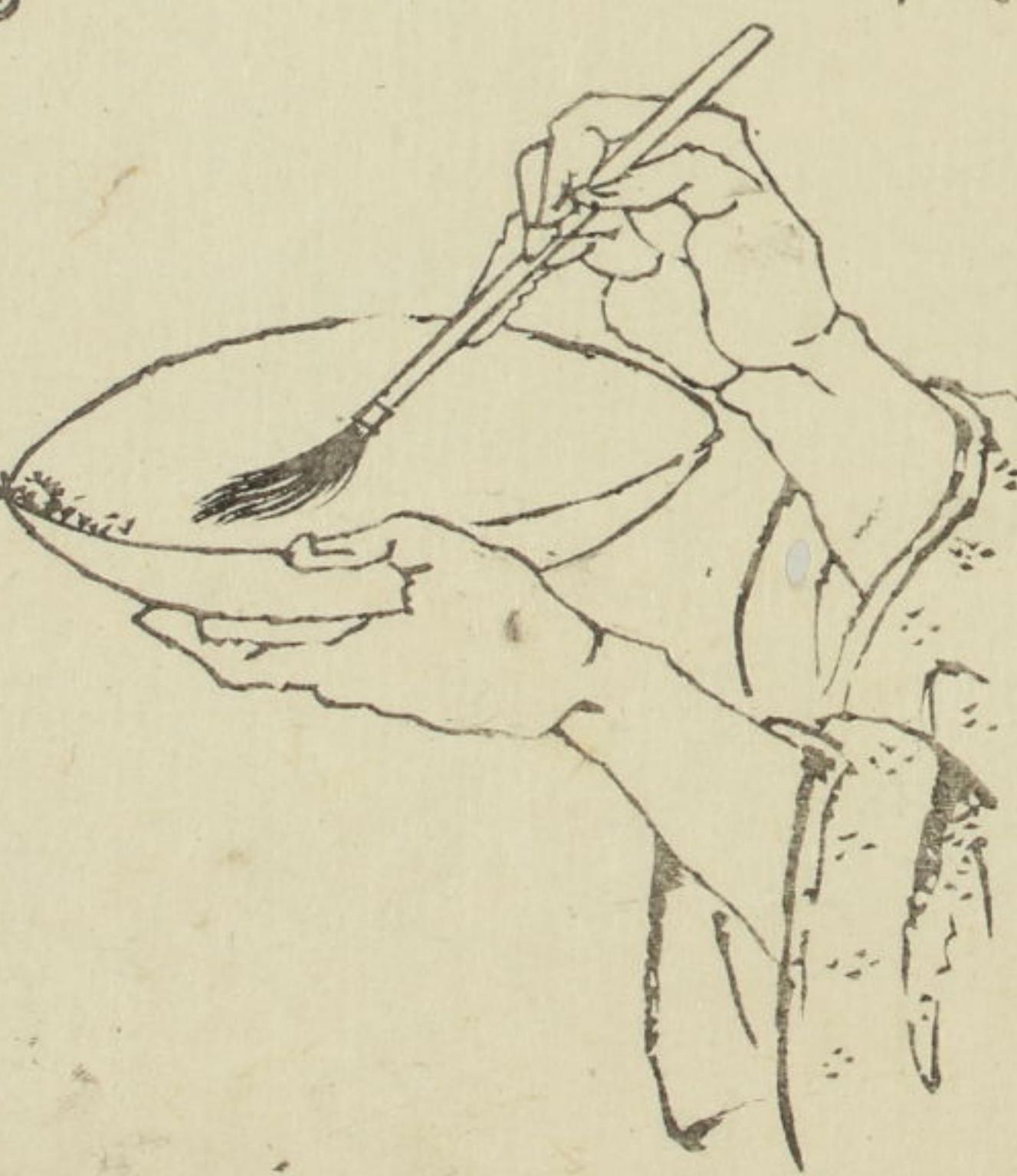
無筆八右衛門曰

画を好む兒童の爲小と成一安近あひたのとをくわづか
一小冊とあり、彩色通と題すと已六卷より一十八年獨り一
て少くも怠らざりし事なりで今方すの爲中に演じること成
得べば惟赤と紅の色とくわざる藍と緑の別ちある故に多方長
短の形と脱糸の外へ触ふるうれど編と経と冊と重るるは
らが大洋の列島急流の奥に他あれ单うるる物て生る所ふら各
之の強弱異なり畢竟あつて高く飛む亦飛候て實をむきむじよ
まを平かくももたゞ千歩千里一步の勞とりとひそせ業よ擬
する同志の輩小對一鳥游がゆくも晴日の序玉とれよ
て一合せをする節の違かる事もあらず我らの道小枝突き
たるもあらずともあらずともの歎

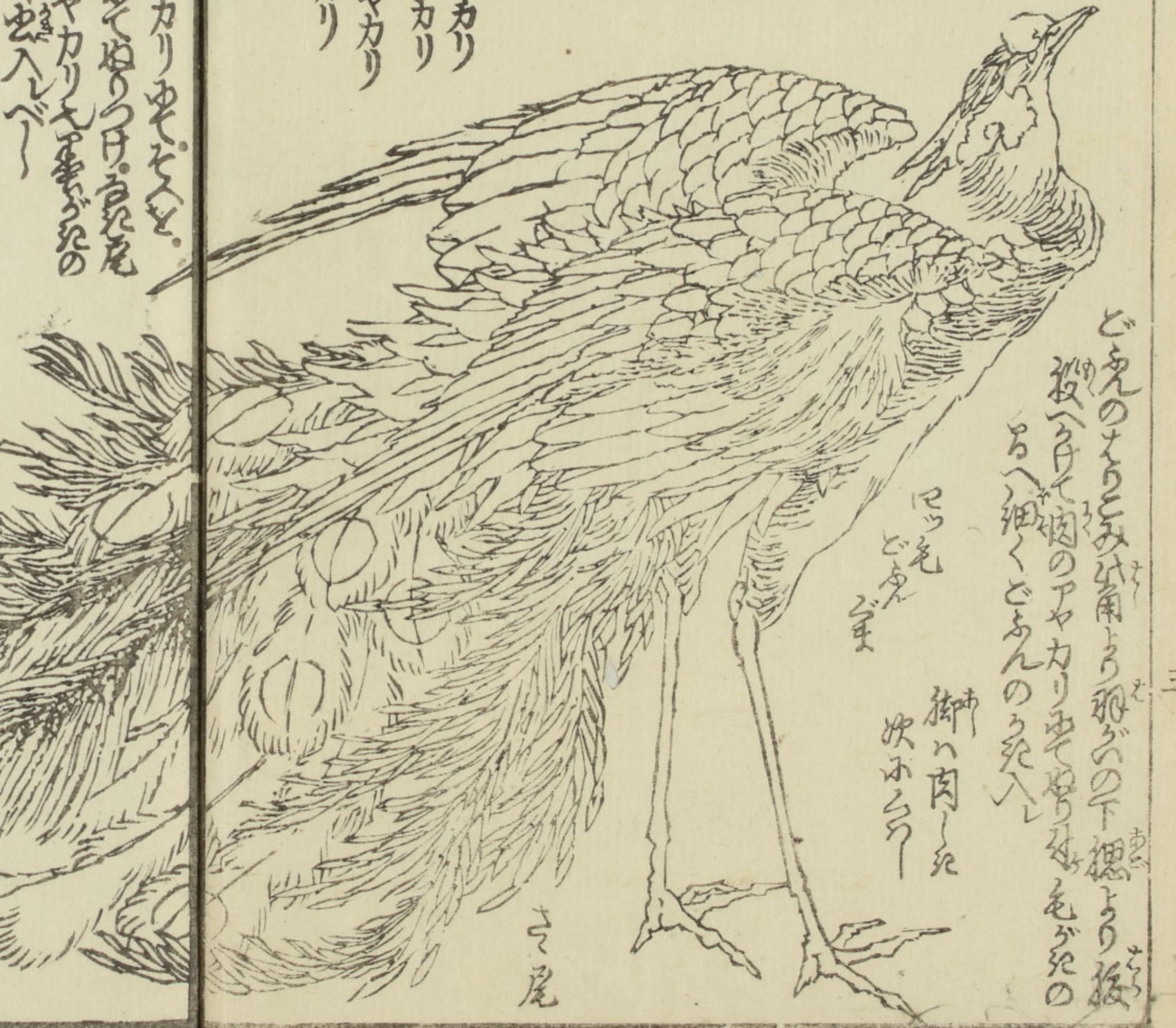
初むせ人にあひす

阿膠彩色の事

- ノゾとふごふんのとむるへ
- アヤカリとふぐんの申へほの様形をうむくまびる
- 絵の裏をこゝだらへてその〇フカスとくねのぐやもぐと
りあらうるみそとあるをひ
- キメとくのぐみをまどり
- そりけりるをひ
- カゲタマとくひくがまたまつて
たうくみあひくあらざるゆゑ
- テリグマといたくアアキムヨリ
くばくある事あひざと云
- ゑのぐれのまつまつて波云



オドコトヨリ皿のあちくと
湯のどくつをとべ



白鳳

のぶ
のぶ

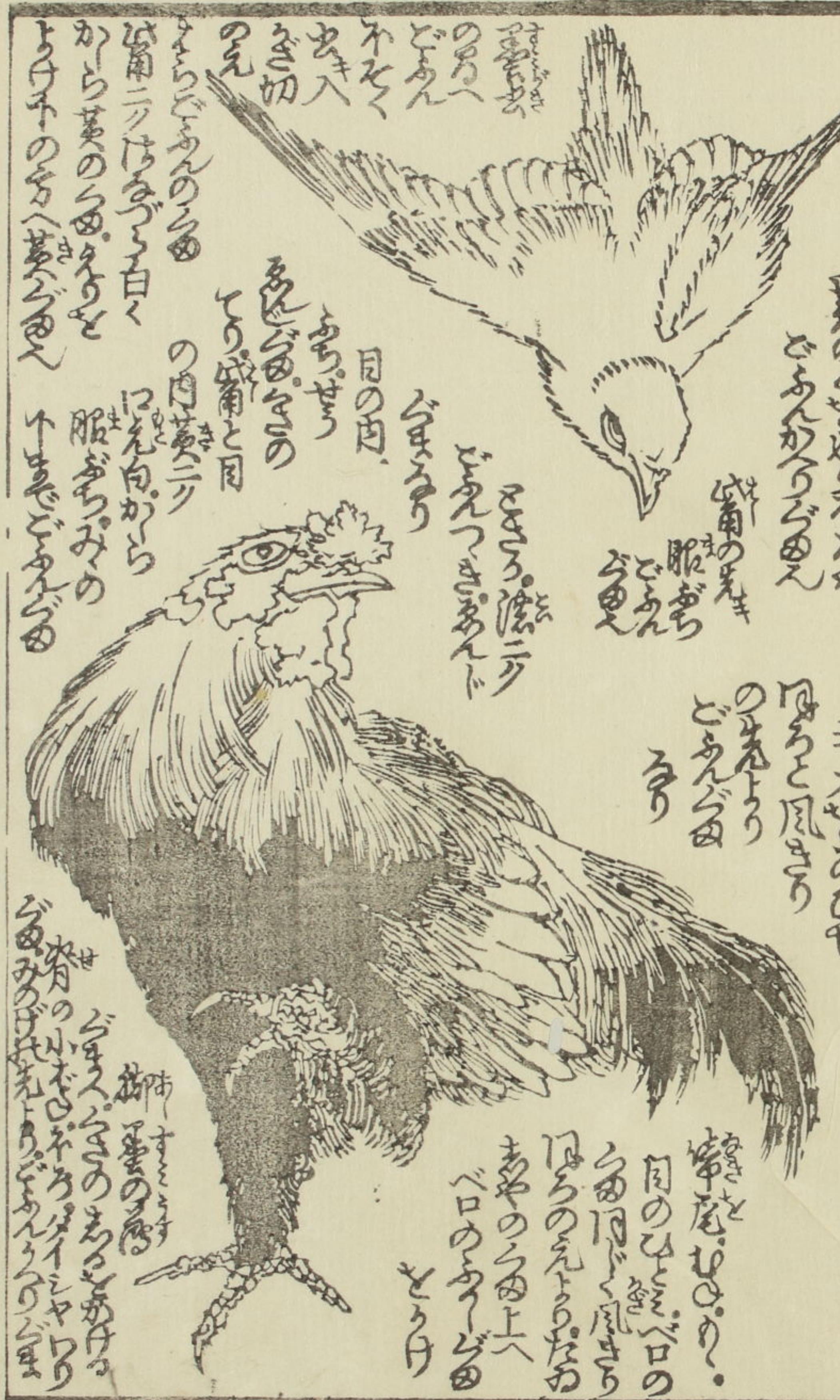
さう。おのれ
肉をどあんのつせ
せうあんどうがま

ひづ。サづの
家。毛角。えり
肩の小毛ひれ
ひそくのアヤカリ

小ぼう。まき
大ぼう。まき
かききり。ぬるまのアヤカリ
さき庵。じゆくのアヤカリ

はアヒル。肉のアヤカリも、そぐと
あさぎのアヤカリも、ゆりつけ。さる毛
ニラも、つるぎのアヤカリも、まきがねの
うえ、ごさん毛も、細く入レべ。





万年草

ものあります
アトリエモジウム
社ともあります

四

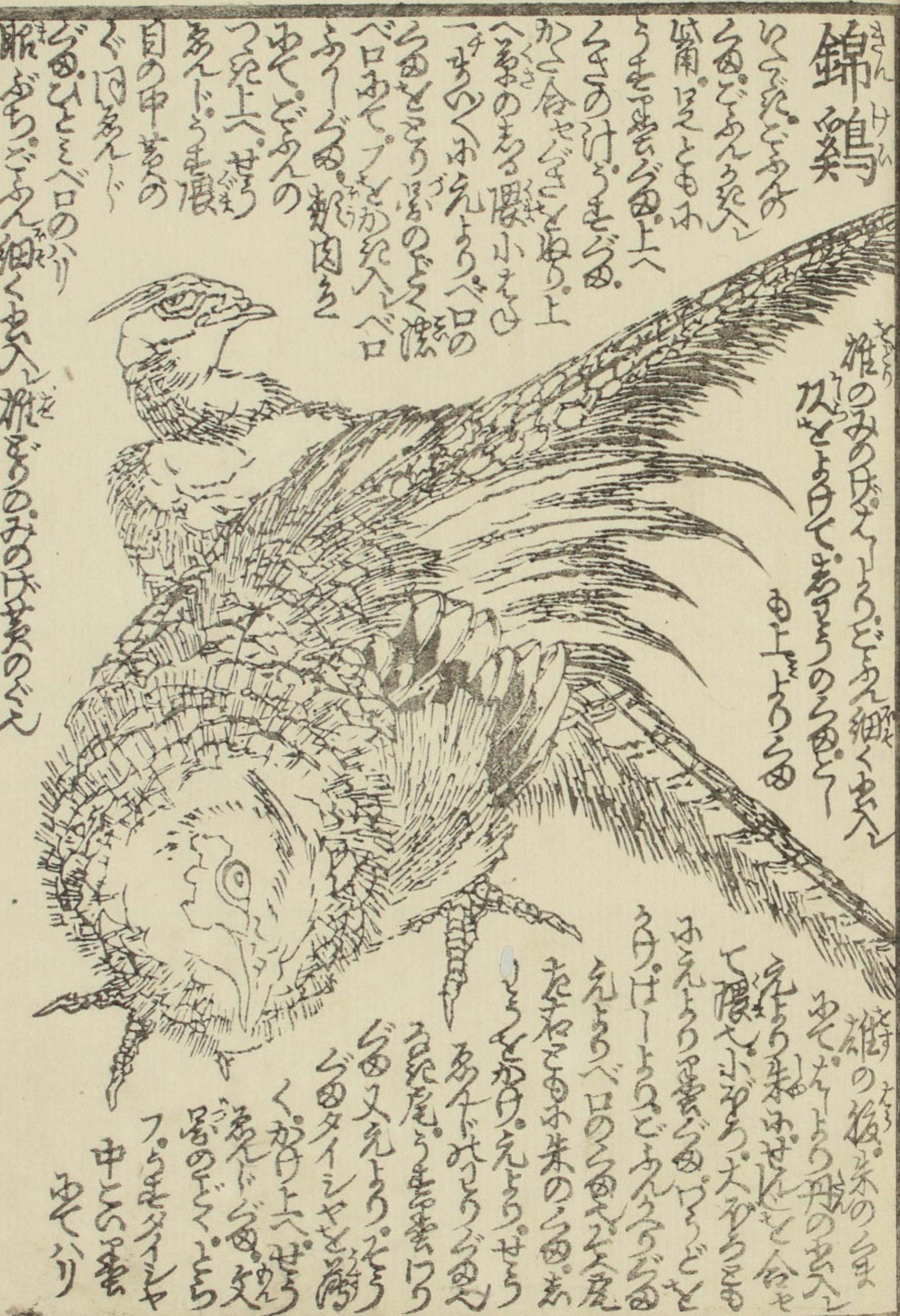
鳥から

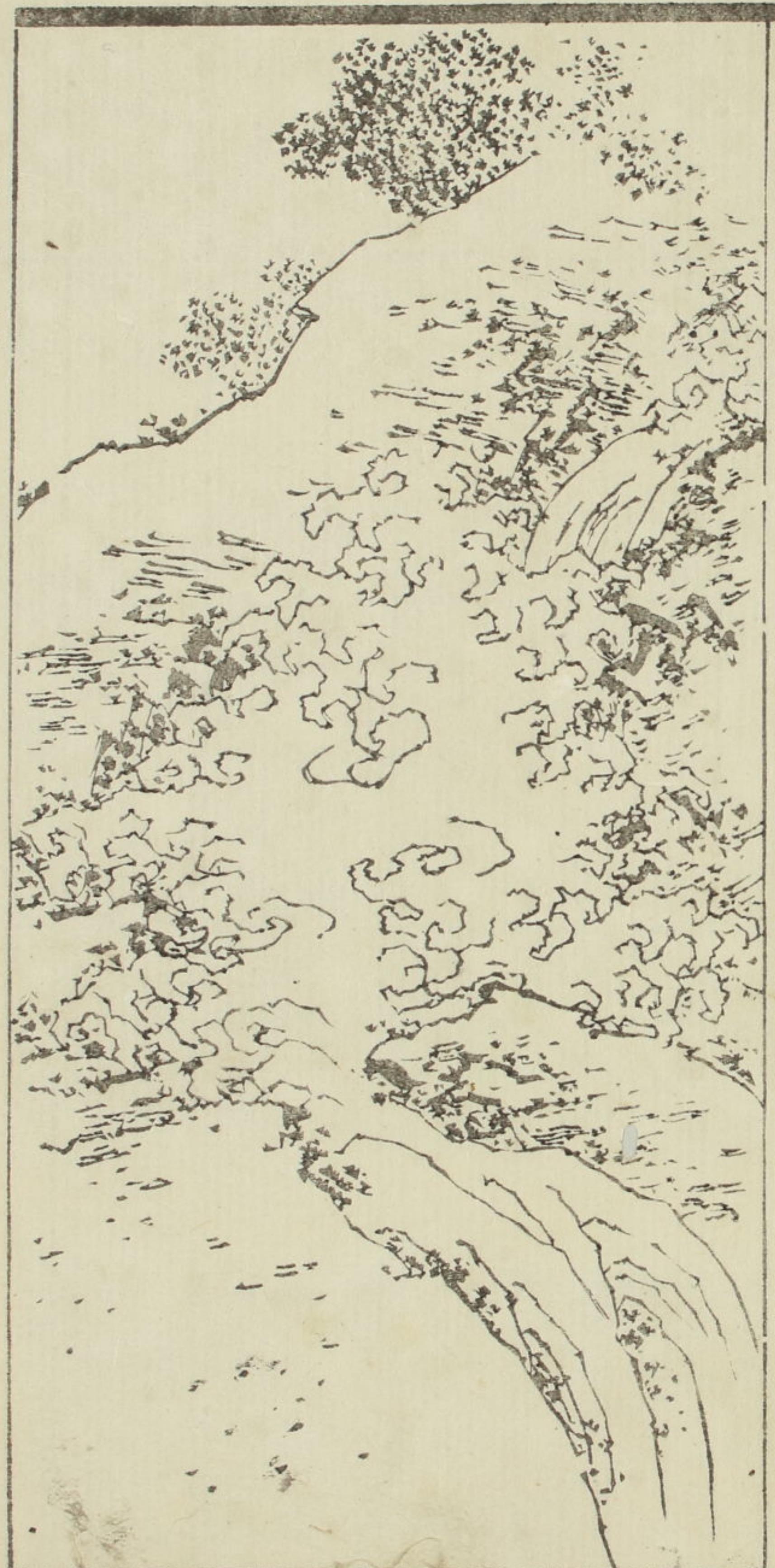
あらの先とよけ

サメとあひや
風と風かの
の先よう
じやんぐ
き

よきと
帽尾ひのわ
因のひとと経べロ







就鳥

金絲毛
黑毛

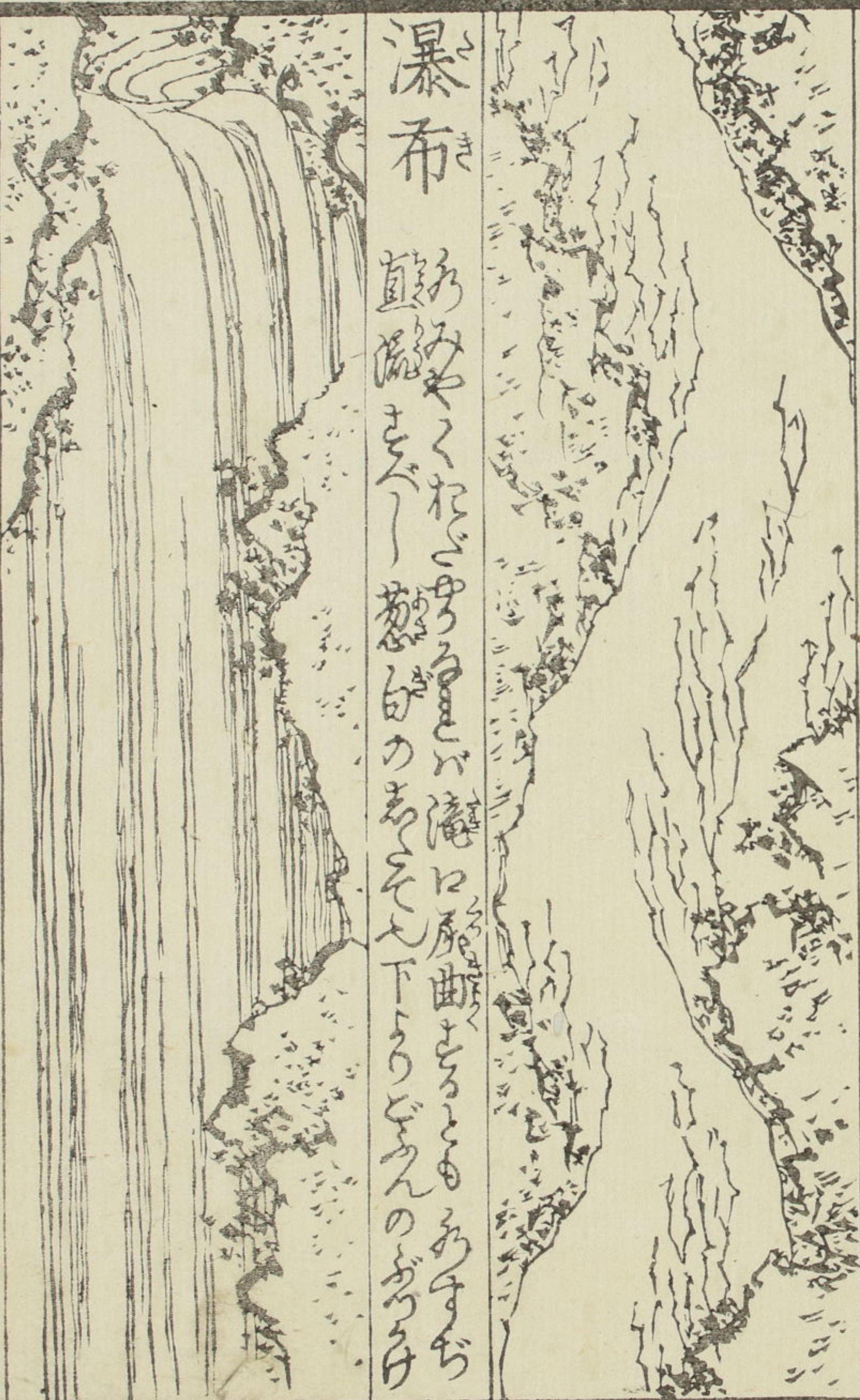
御の菴のキメ
朱のキメとある
後へ口の金。さづ
きのキメなどある

山ふ山脈あり水ふみ縦あり天地のうふ生むる。抱ひきまもその肉を包
み肉又のうふと圍み相ともに包みめぐりて各形え象とす。たゆふ味と
けづりて初めととよとをありて号はく本日とよぶ金石ねとりどもけ理ふ波
とよとゆの内て氣とあがく小方抱自立るをせんやされば岩ふ激しくさざ
くとも其のひみゆくを生ひきるをもふれりて重へば

たき石ふよ／＼もひして
れいゆく金川



A vertical ink wash painting of a waterfall cascading down a rocky cliff face. The water is depicted as white, foaming lines against a dark, craggy background. The style is minimalist and expressive, capturing the movement and power of the falls.

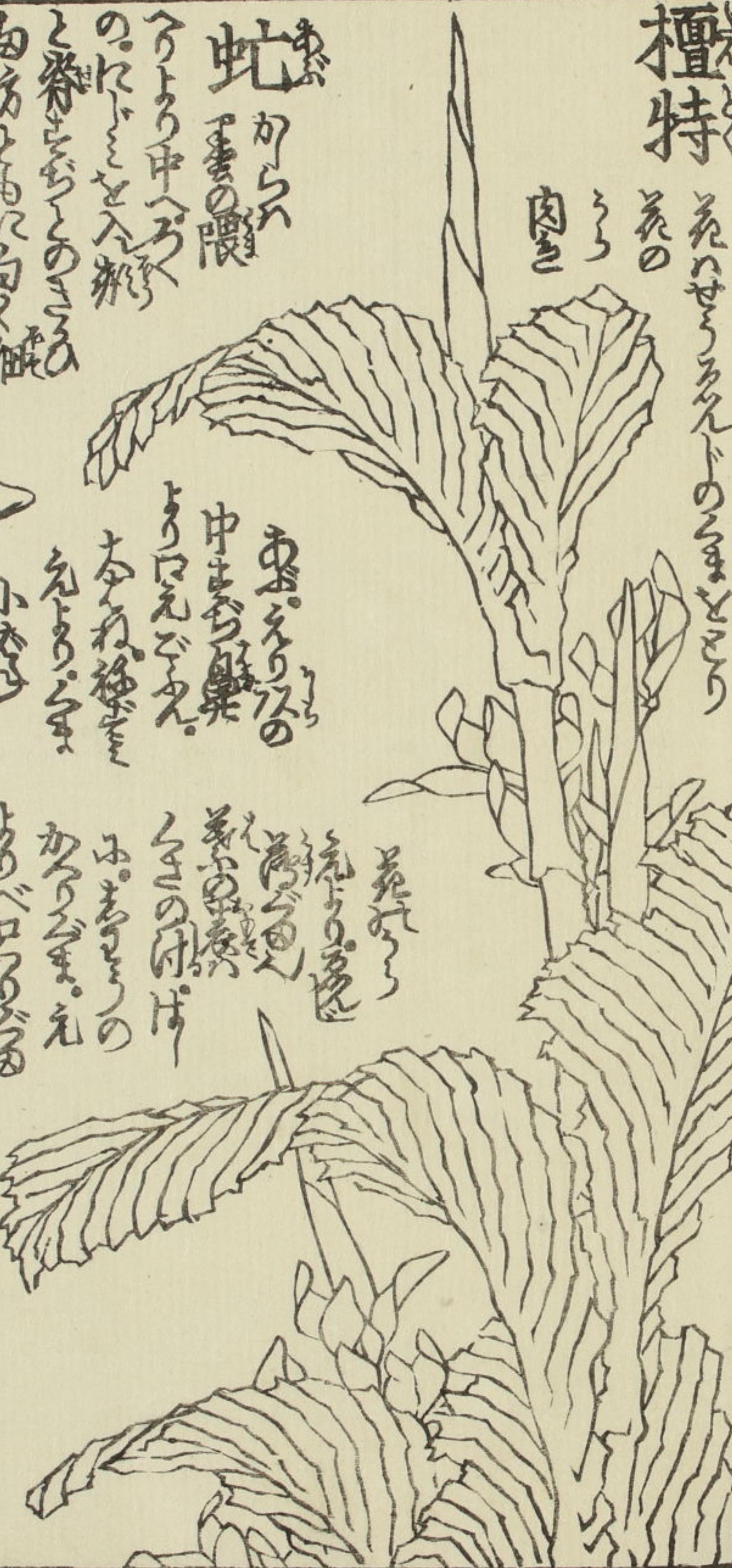


○ 獅子體 といふ。花の多くは緋色のものと白いものとある。自らほんのときはみぐれ
獅子體 といふ。花の多くは緋色のものと白いものとある。天日光焼つけられたるものとあれば
○ 花の多くは緋色のものと白いものとある。天日光焼つけられたものとあれば
あて煮つめるときのものとあれば、蒸し器で蒸す。かくして我法へせうるをとどく
ありとて、やうやうとよくはとて、蒸して、蒸し器へんまつ用ひ。かくはなから
まつて、かくはなからそれよりはくらせなどく細くふね切みくわそはなから
四へあきこへし歴史あらかじて。よやど熱然に中へせまうあんじとよく
まがり出して、血を捨棄するせめふうてきと体を血を捨てし。ま
かくふうとうれ四の温ゆりみて、蒸つべ。○ つべの腰とりふけせうるの
中へせまう。あんじ入へ施毛にさくらむ時あと附けふくらべ。その上へあは
せんあじあせ。あんの上へあはひのあゑのくを腰毛く腰へむくらむりと
あじ一ことにその腰のくふ。あんと合せそのキメ毛。ふくらむとむくらむ
腰と立てて、腰毛を立て財へらぬぞりがと。たお骨毛の外へ革の
たづらひにせらるる。腰に表裏みうるがうるべくもぐるりあくまくや

檀特義

花のせうるえトのまどき

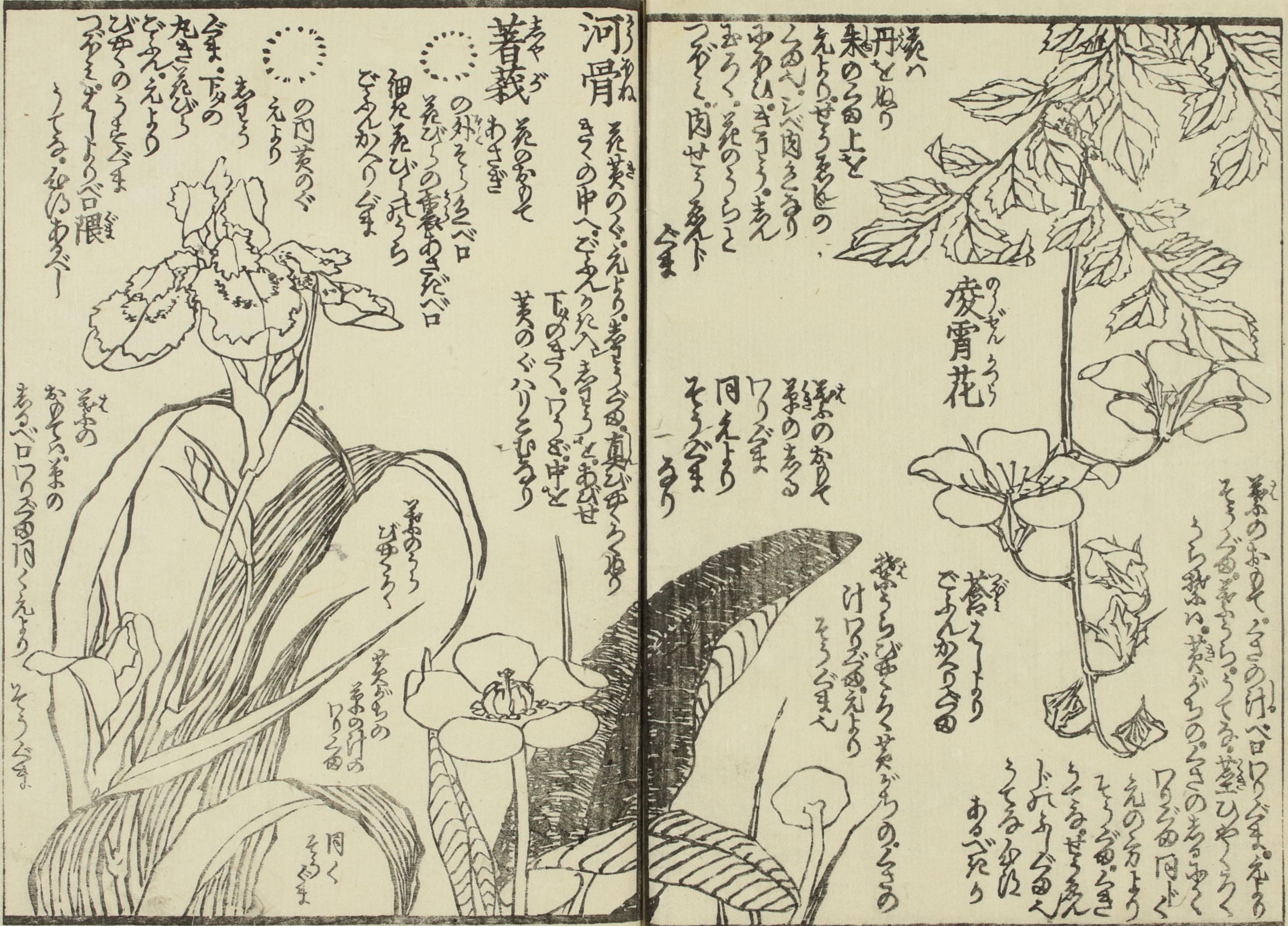
肉茎



此
かく
玉の腰
とうちゆうへば
のにふと入瓶
と發毛のまき
あ方ともに白く細
まちとめうてつる
むきとくら木のキメ
を合せえ。櫻より
死木のキメを
櫻より肩の木の木
フ。櫻葉茶の手入れと
おねまつをす

中まち腰
とうちゆうへ
あれ。櫻毛
あらじま
小なり
タナ

日をうぢま
びゆう。櫻のじきのけぐ
をとより。びゆくを入るを
う。せうるくまく。かくらの
みだふ。かくらのびくらを
かくらま





烟草

おもひやあをうかがふる

おのづかち
より色をうます
方に仕立べ

うそをかねておもひとせりの
ごくまことにゆきとておもひの



迎陽花

ものもとへたまを出四ド。たゞ、このあくままでまことにのまう
大きき、おうえんへ、びゆうあてゆる身、
墨の下り、自がちれびく
ろくでかきへ、その上へあらぬをうせ、うるさき。
まもそつて、おもむくせうせうる

○先づまのぐとゆり一トひらびとあわよ
きとうれいとよ・上の「トうよと元
より牛のきあやとうせとま
けりえひのきくとま
ぐわてはのごとえ

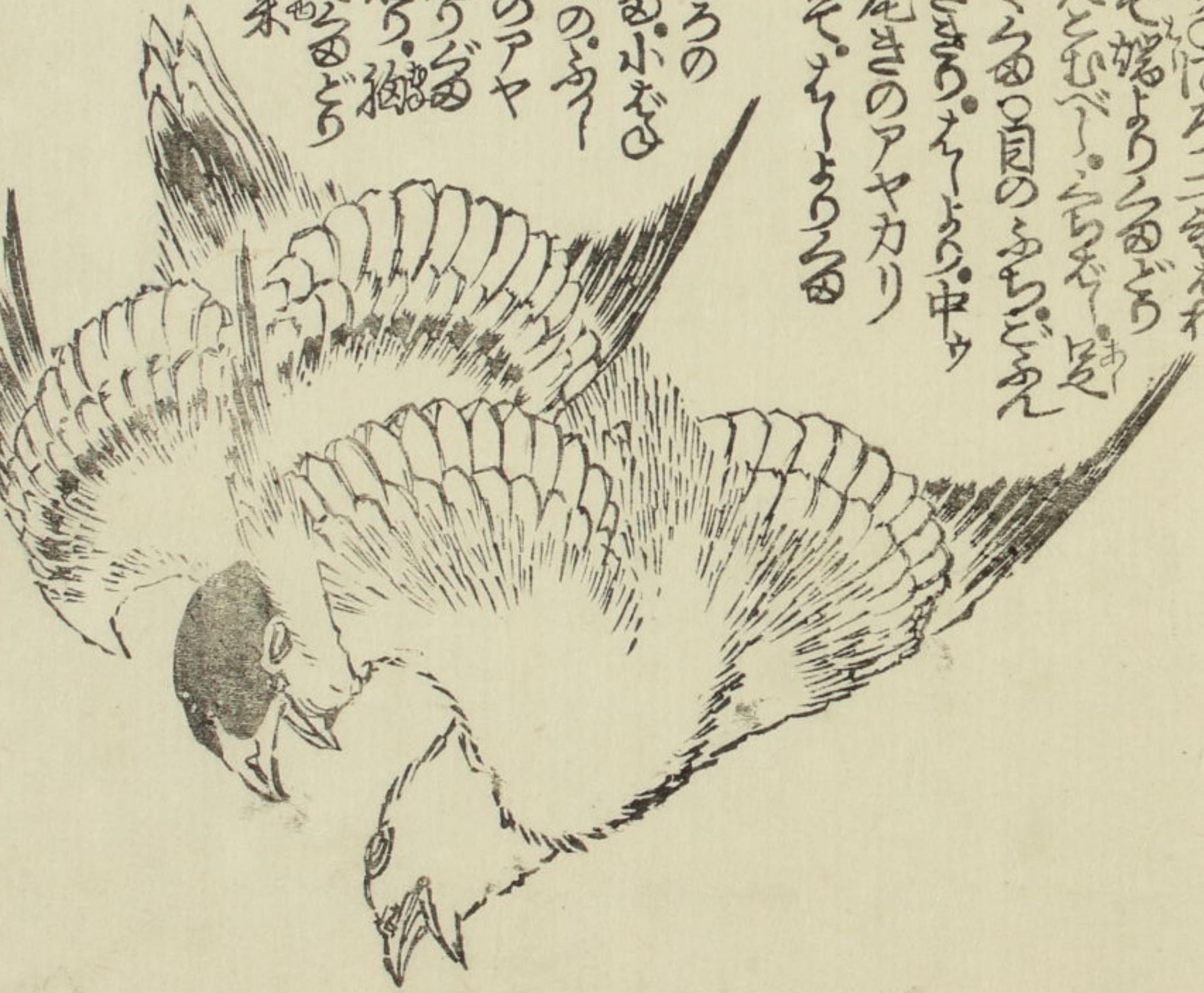
卷之二



千日紅

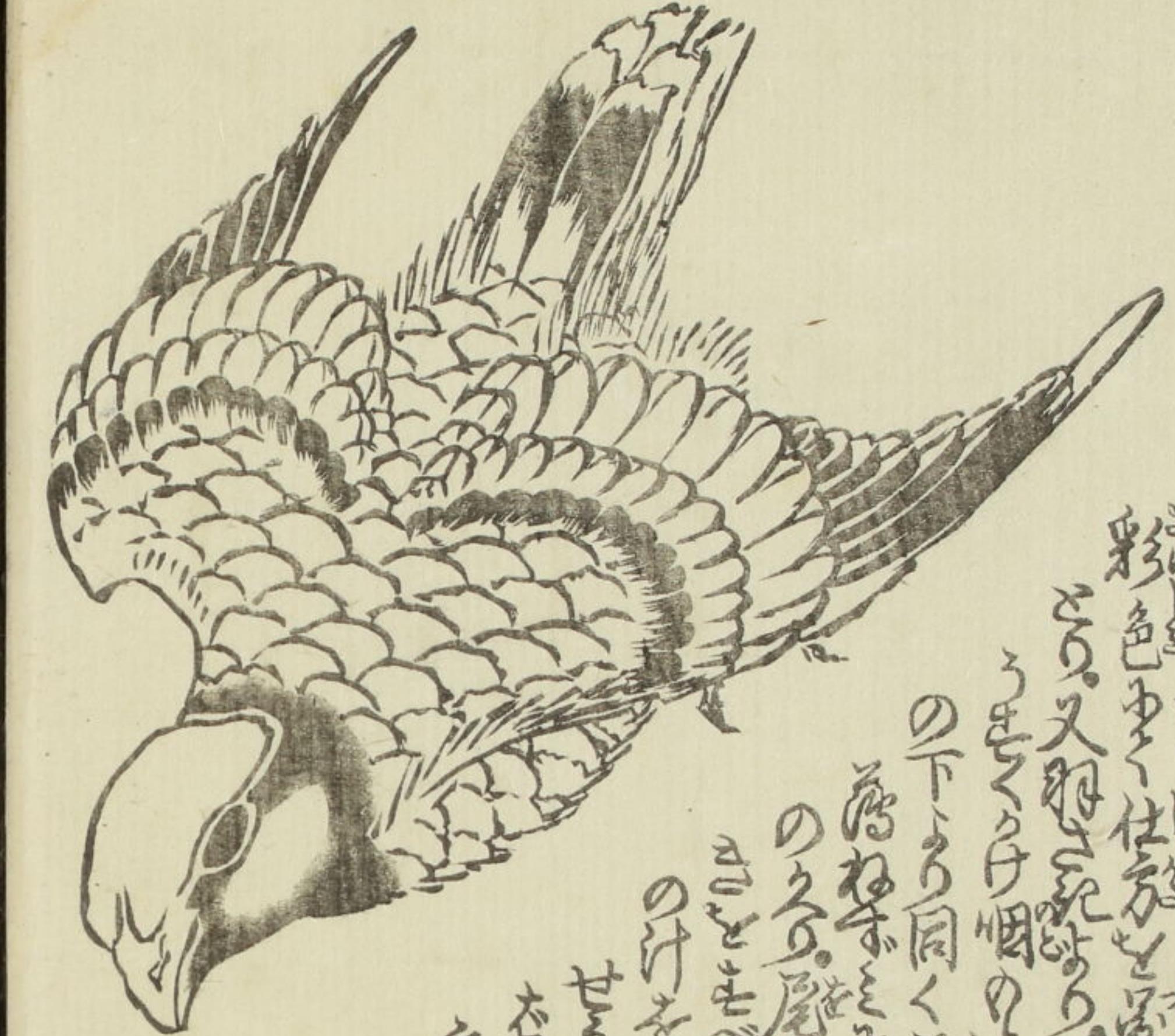
○せうあードのぐれきめも
一ペルあびせ。朱のさあも
せうえんドシタ。かざらはる
ざり。だり。海とみうげ茶
まうて丸く。モベ
○はのありを食せざき。このけ。
ワジ。ま、向くえようもう。ま
おべうのあい。じまう

虎耳草



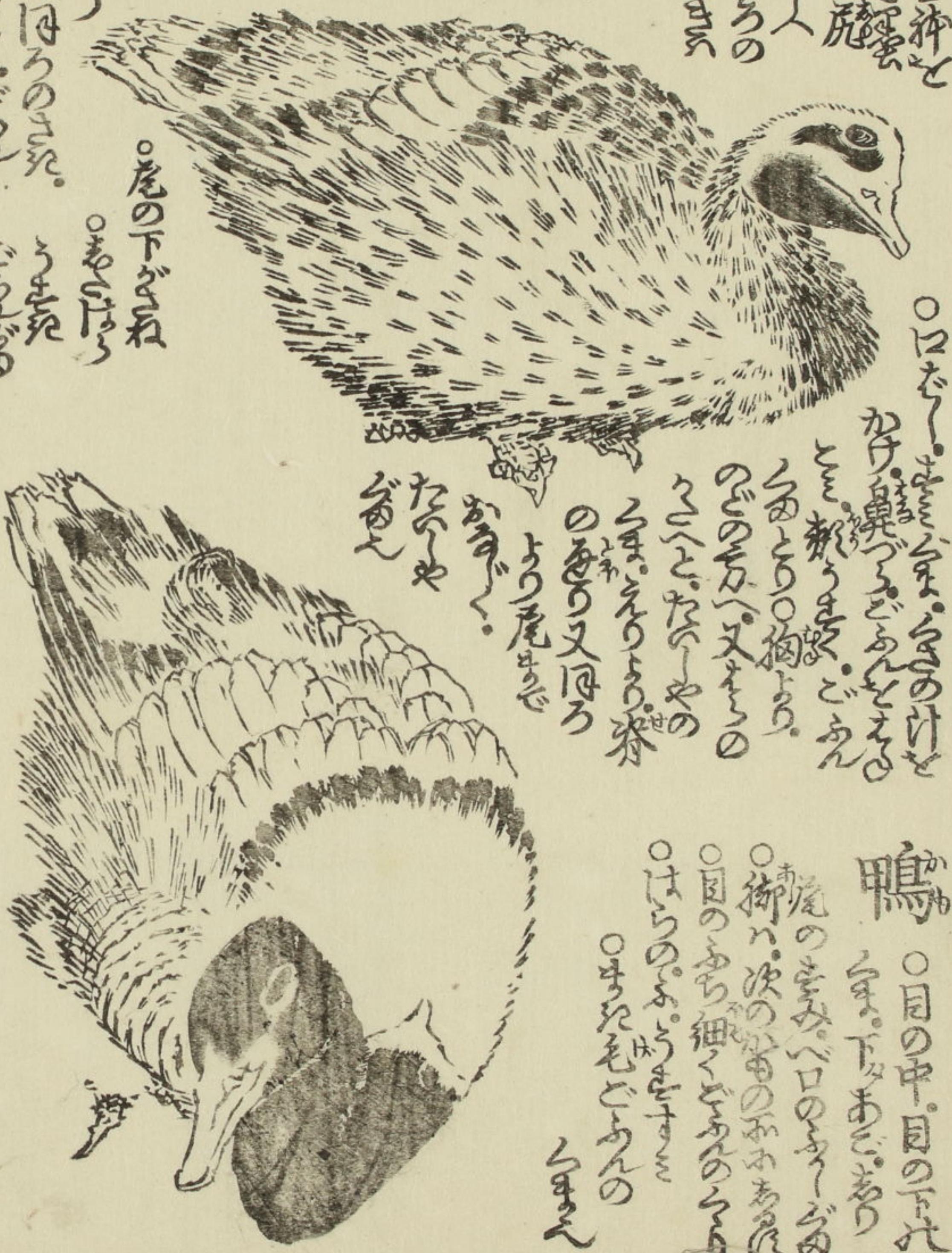
鶯
○全林。察るう藍羽。下。尾のより。あわ冠の、
かぎより。あり尾中。ぎとのくら上へ。
ぐ。二。が。う。羽根。や。う。あり。尾。つ。う。
○覆。肩のう。り。尾。だ。ま。と。う。ご。そ。
より。下。タ。ま。り。う。り。そ。べ。ん。ぎ。う。の。き。あ。わ。
の。も。よ。り。せ。う。え。ん。ド。の。く。ま。り。う。れ。
肉。上。へ。朱。の。き。め。ぐ。あ。又。く。せ。う。え。ん。ド。
の。く。ま。の。から。ペ。ロ。の。く。ま。の。く。ま。づ。
目。の。あ。ち。ご。あ。ん。の。く。ま。ど。う。墨。ぐ。

力ナアリ
サモウタの巣の下へどもその毛が死とひびとひびて、立ちあが。夏
うも肉。やうあんじ。うまぐま。口の中へある白の毛うど見え
不そく。ももだの巣じみのくまのが死んでた。立ちあが。中ウ
サモウタの上へぐロのあハ。鳥のあ尾羽のアヤカリ
サモウタ。じみや。立つようふる



百舌鳥

A detailed black and white woodblock print of a fish, likely a pufferfish or similar scaleless fish, showing its body, fins, and a long dorsal spine. The fish is depicted from a side-on perspective, facing right.



鶴。全神と
うも雲々。
ぐみ虎

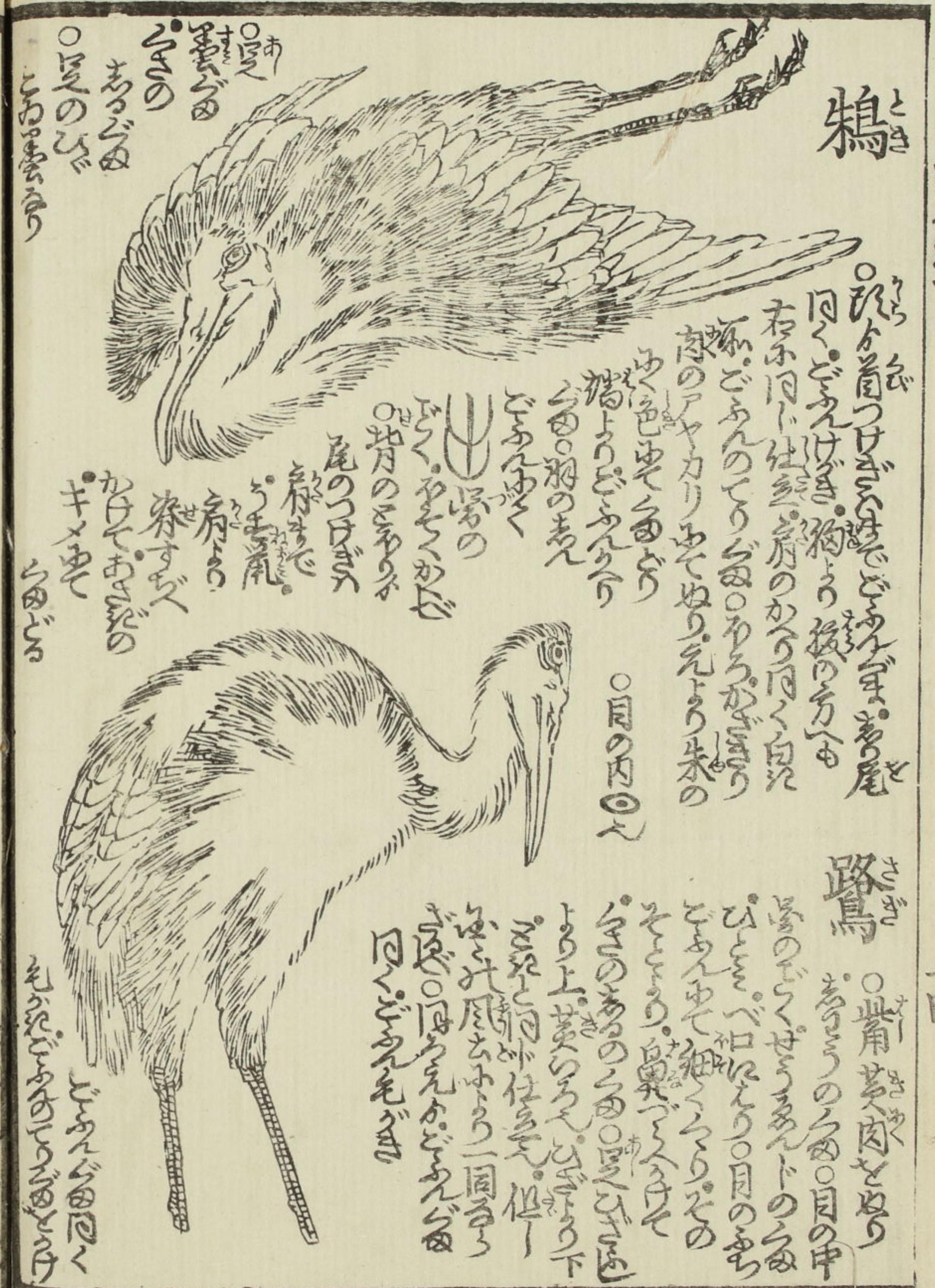
〇口たす。まこと、うよ。まのけと
かう。鳥樂づふ。ごあれともも
とも。おれうまく。ごあれ

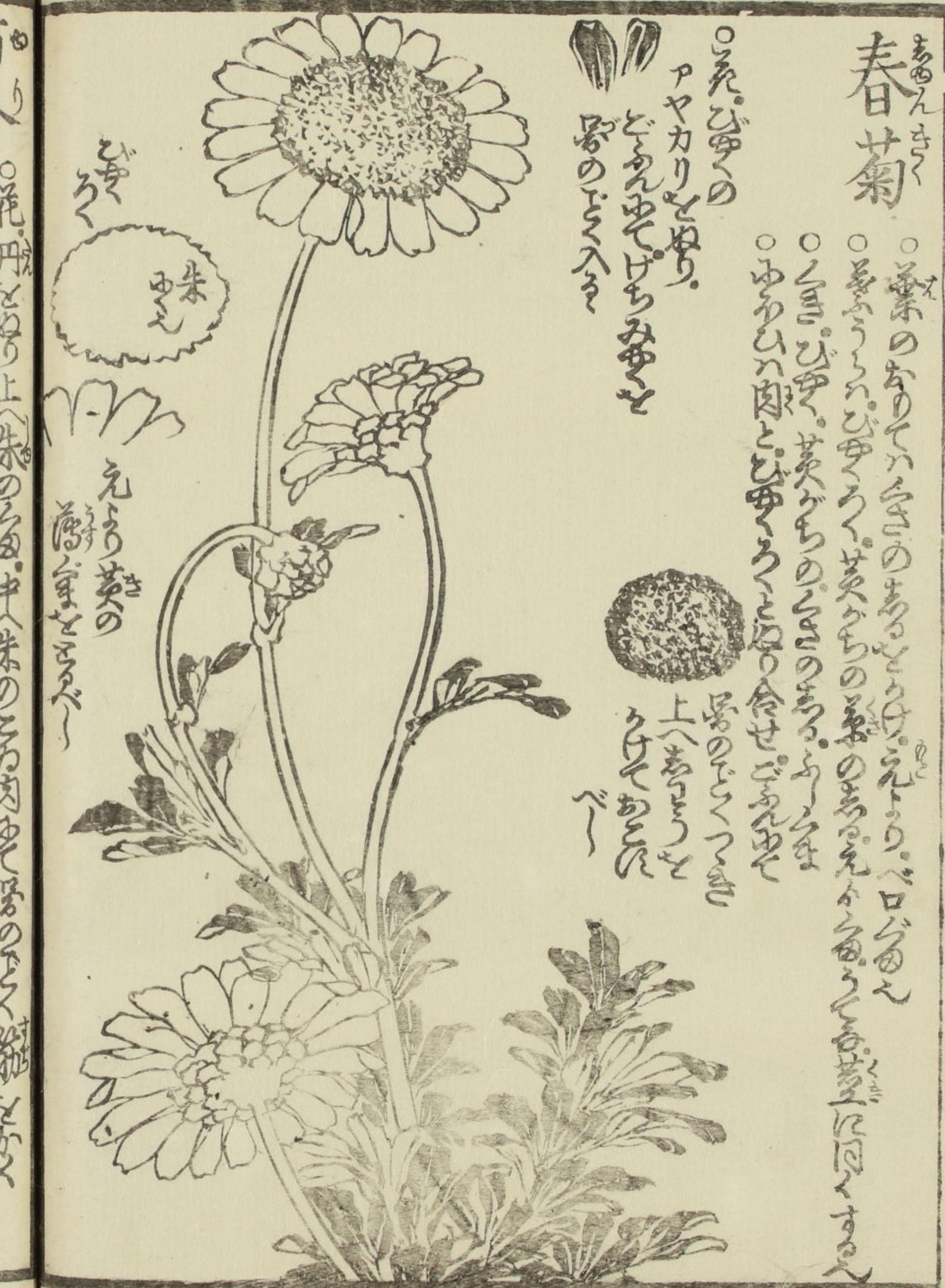
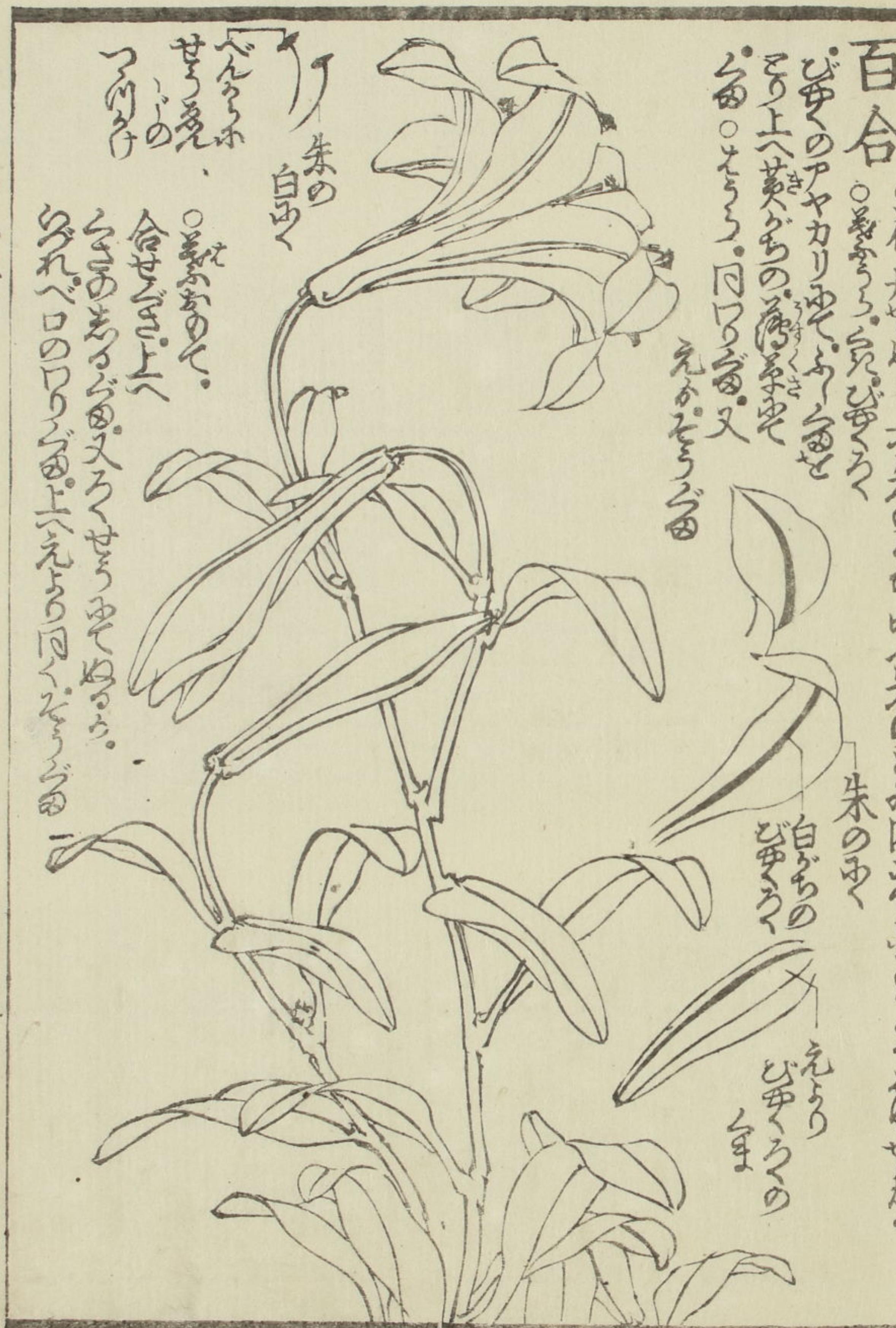
鷦○日の中。日の下
のまよ。下りあじあり

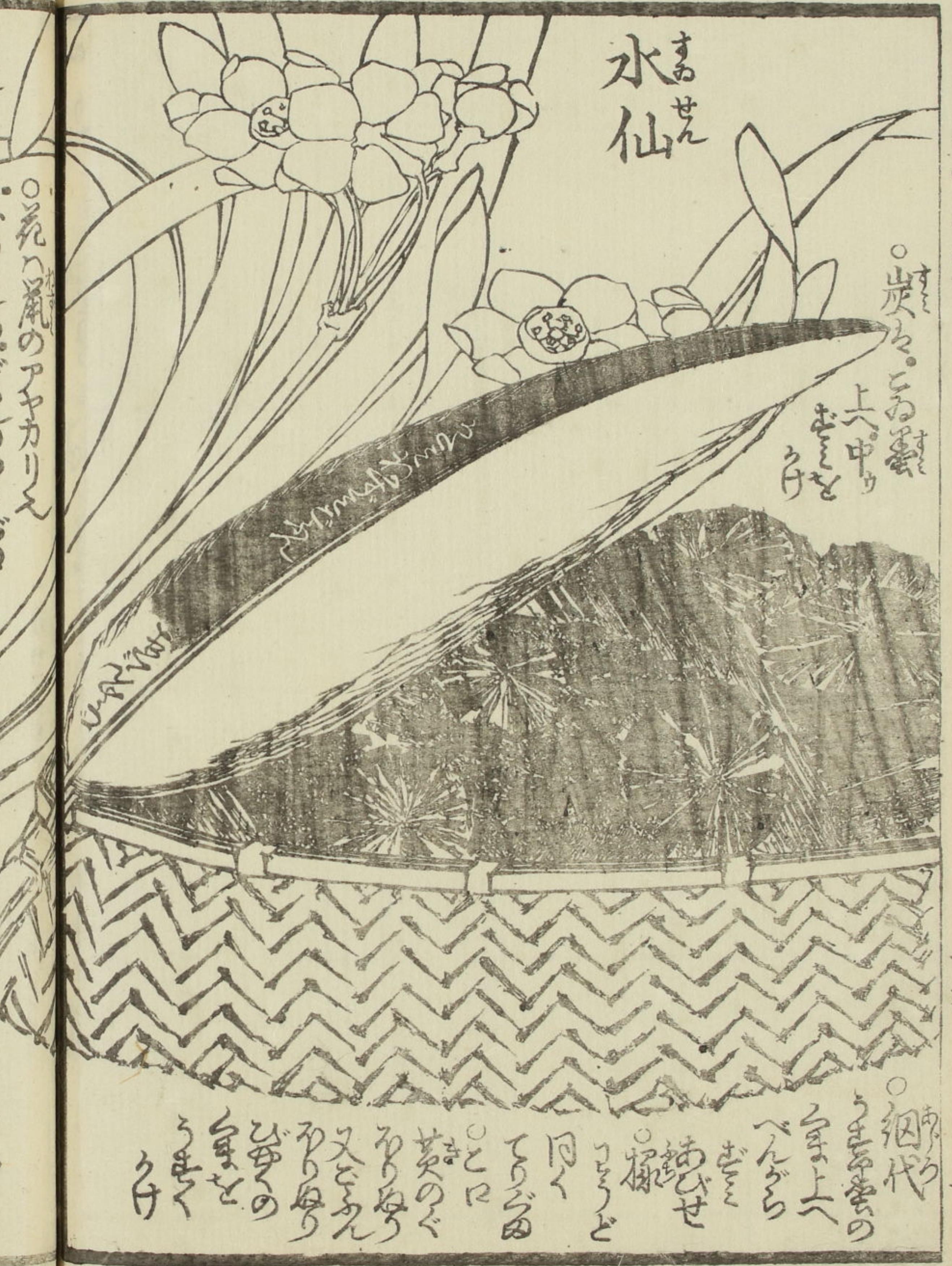
鶴。全神
ぐ。虎
より、窮と人
うそ、慢。やうの
トより尾のみ
まで彌せま
よし後へ
て、うもぐ。
目の下。あ
あり、見え
濃さま。

か。まよ。ひのけを
か。鳥づぶ。ごあんとまよ
と。新うきぬ。ごえん
と。あとり。ぬより。
のどの方へ。又もの
くいと。たゞ。やの
ふ。う。う。う。う。う。
の。う。う。う。う。う。
お。う。う。う。う。う。
お。う。う。う。う。う。

鴨。○目の中、目の下れ
るま。下々ありあり
○庵のまみ。ベロのまくら。
○御へ。次の事のあつた
○圓のうち細くざらのうす
○はづのふ。うそをすと
○また毛。どあるの
△







水仙

○炭も。ある。雲
上へ。中り
おもと

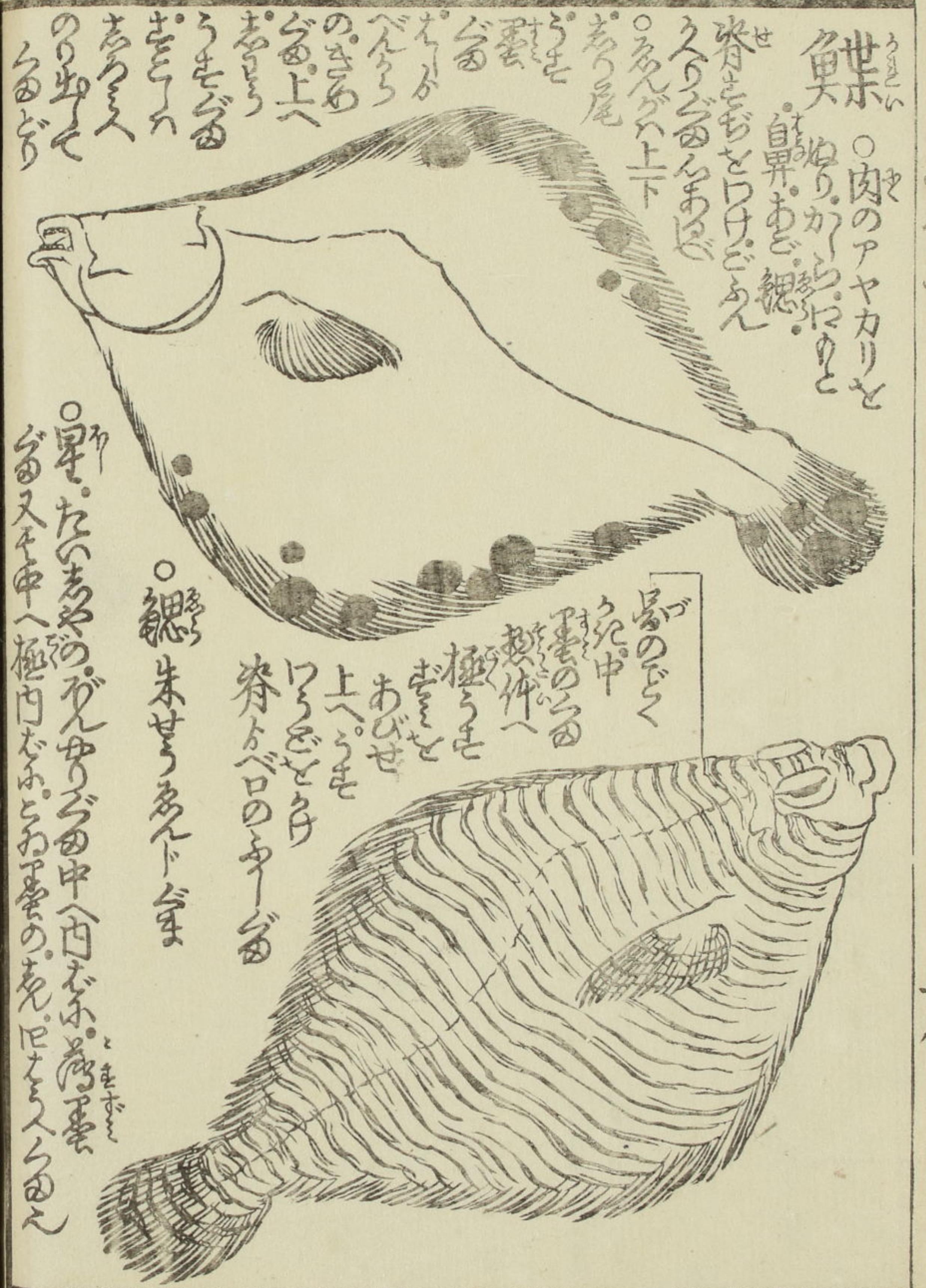
上六。中ウ

細代の
年上へ
へぐらき
あひせ
猿體と
てりぐ
とぞ
まきに
やえと
ゆくの
をもと
みと

さあじろくとくのワリバ
をひのえん。ども寝る
どくか。にわい・朱と・おひら
の食せゆそゆ。ワジ・おも
モ・まのどくふ・きよし懲
ち。せんのアヤカリと・やべん
ぐふ・せうえんド・つ内
のまのあと食せゆ・えよ

鰐 うきひ
○肉のアヤカリと
自鼻。あと、腮。

脊 せ
・身をもとつけ。ごくえ
スリぐる筋。上
・えぐへ上下
・おの尾



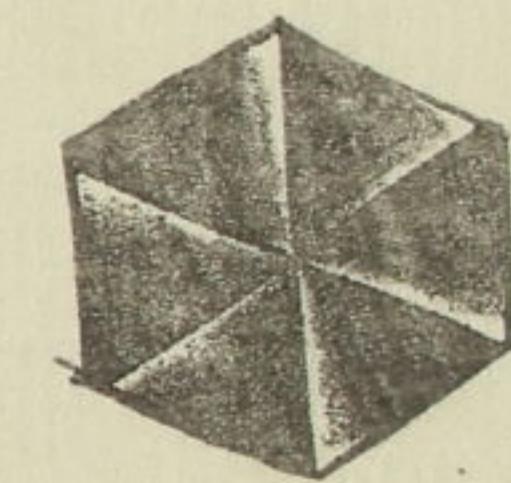
○腮朱せうあんド全

寧。たのあや。がんせうあん中内をふ。筋玉
を入へ極内をぶ。あて茎の毛。毛にまく入へ

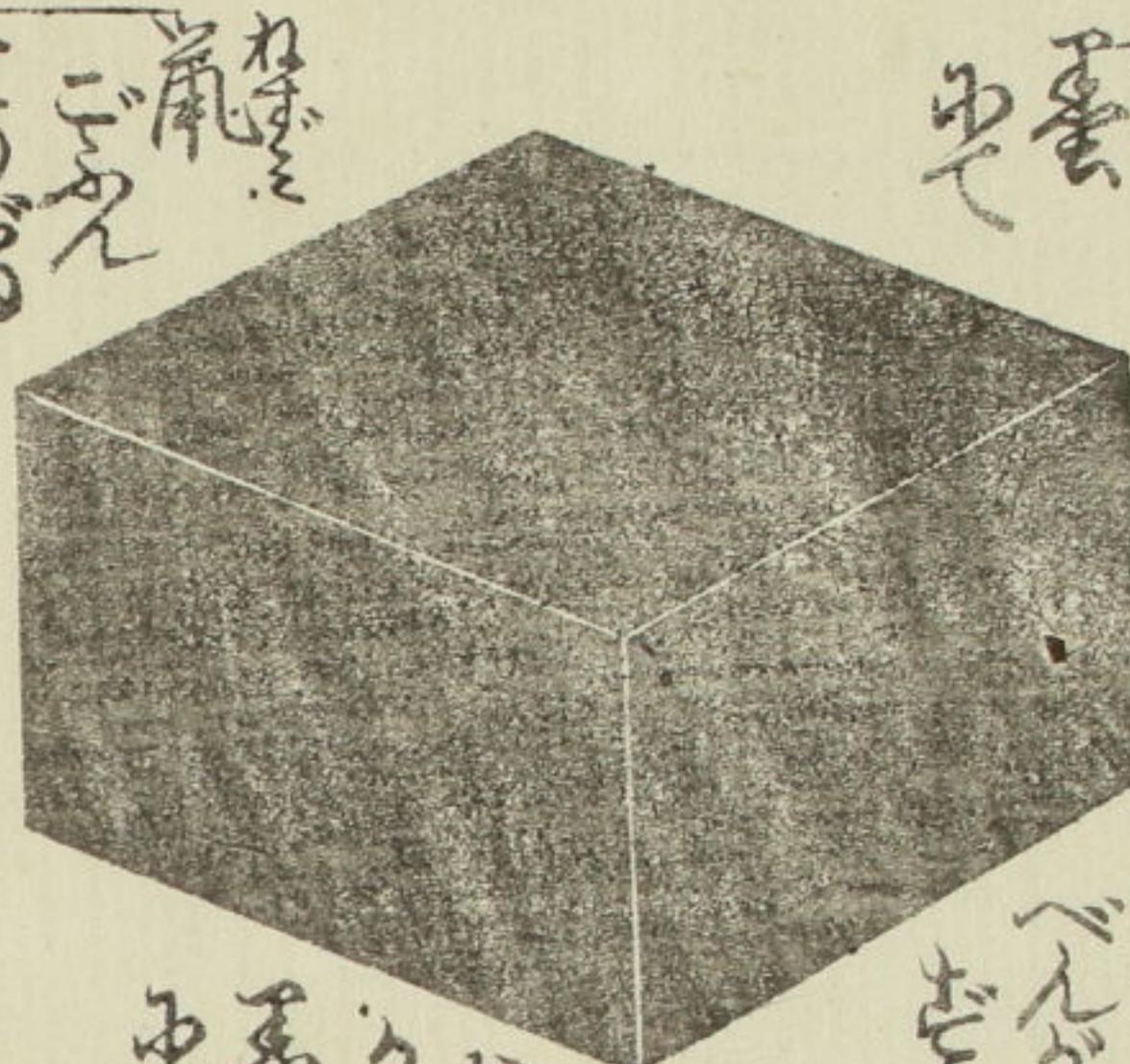
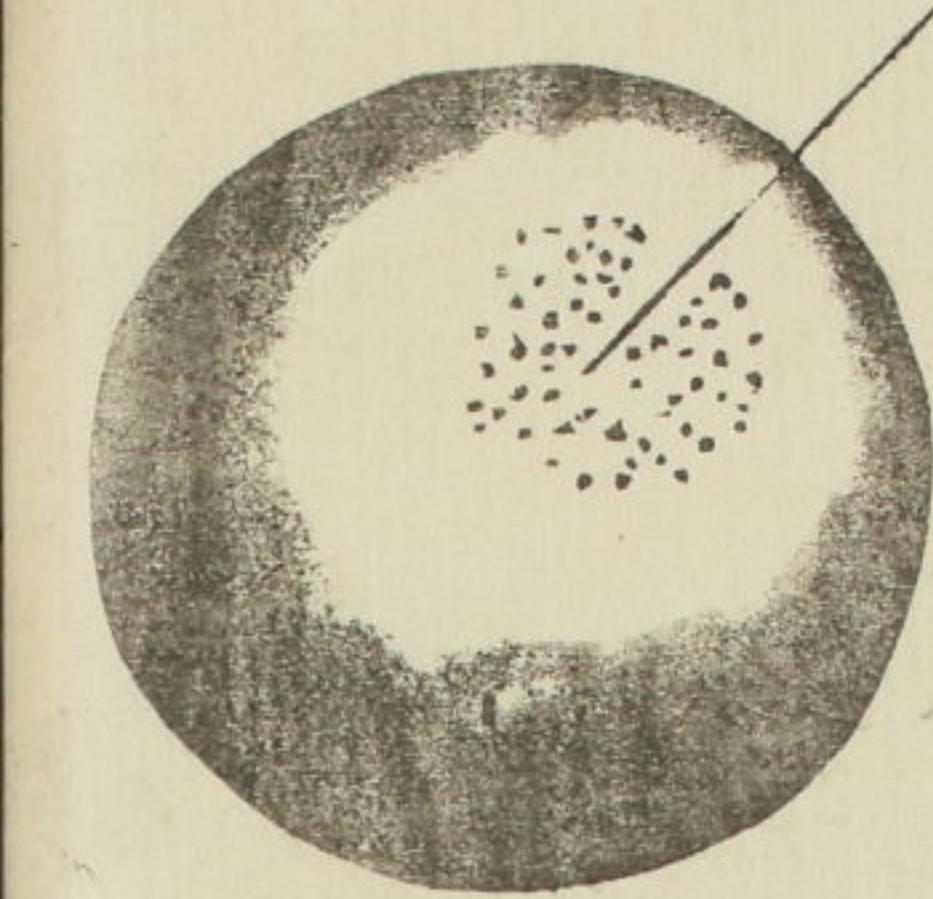
○黒近色ハ若より墨モ塗るの外をアヌビ。筋がんにて
それど。やう茎よ残して黒近衣股小隈どうり。口をアヌビ
○黒ふ次キアリ新ノ死育り古ヒアリ照あるふのと
光りふれのと。その次キアリとよく分らと形きことよべ
又茎日向あり角アリ丸きアリ新ノ死りふる茎に
藍うそと加へて塗るベ一古まきのハ。輪んぐと入へて
照らハ胡粉をす一入る夜抜ハ濃墨みて筋がん
あて中茎の隈どうもる。器財ハ筋がんく黒近々を。こ
色塗合されば。その角。毛根ふるくアリ。鰐あらへ膠
丸きのハ。あらうご隈をかけ。次ふ膏をぬま

平
圓

日かえ
べんぐ
をも



角あらたへるのとくふ
二らうと。分て四の角よ。
年をうけべ



丸たれ
巻のぐを
更ゆ

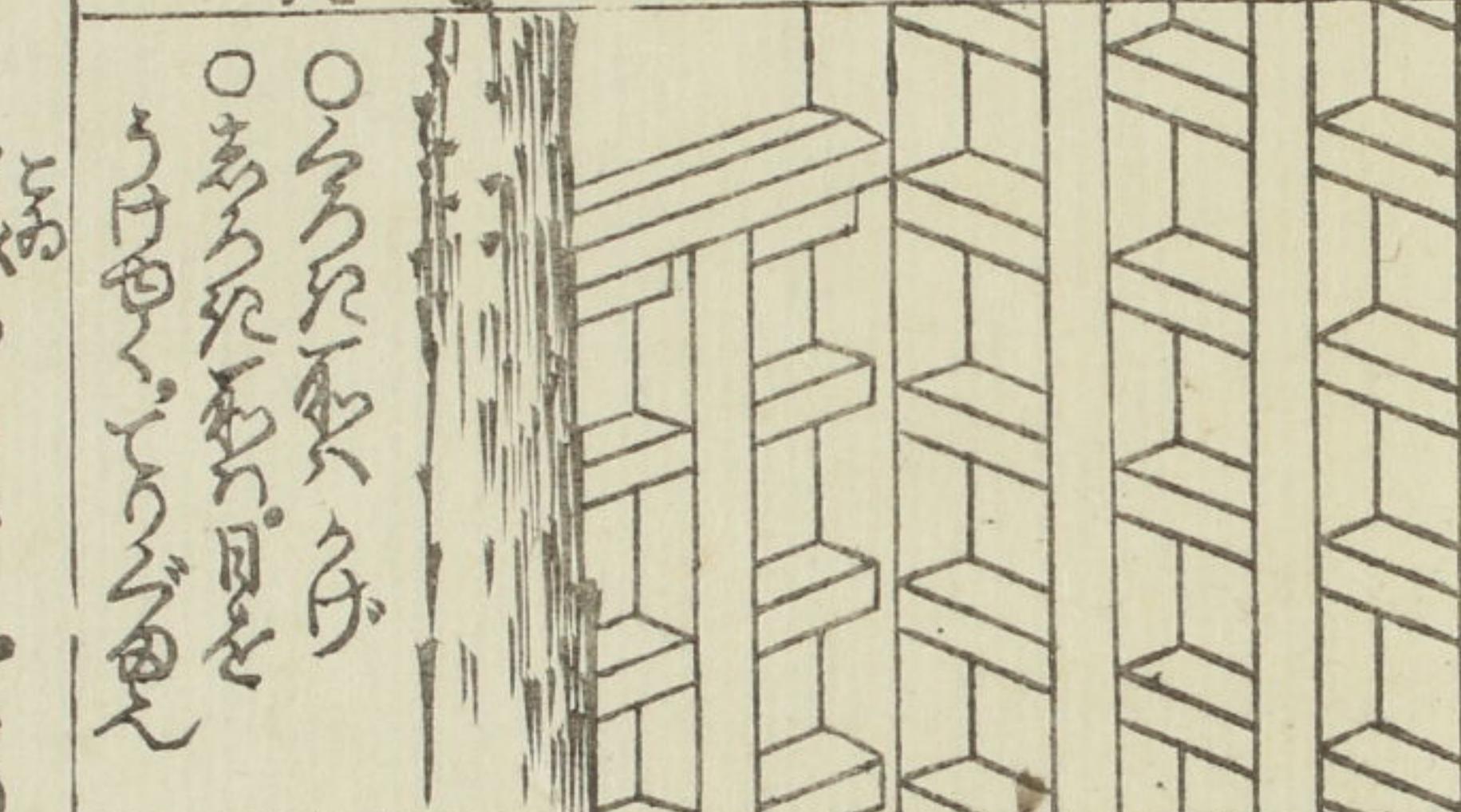
巻まくらむまくらゆふ。星を
はきなみ。隈うちのあくへ
みぎりすもんふ。けーふも
すすふ。これ抜行うすゆゑ
続一たれ。次ひよどく隈まく
らむ

△あらわしのあらわし

ほやをぬすべー

ありま

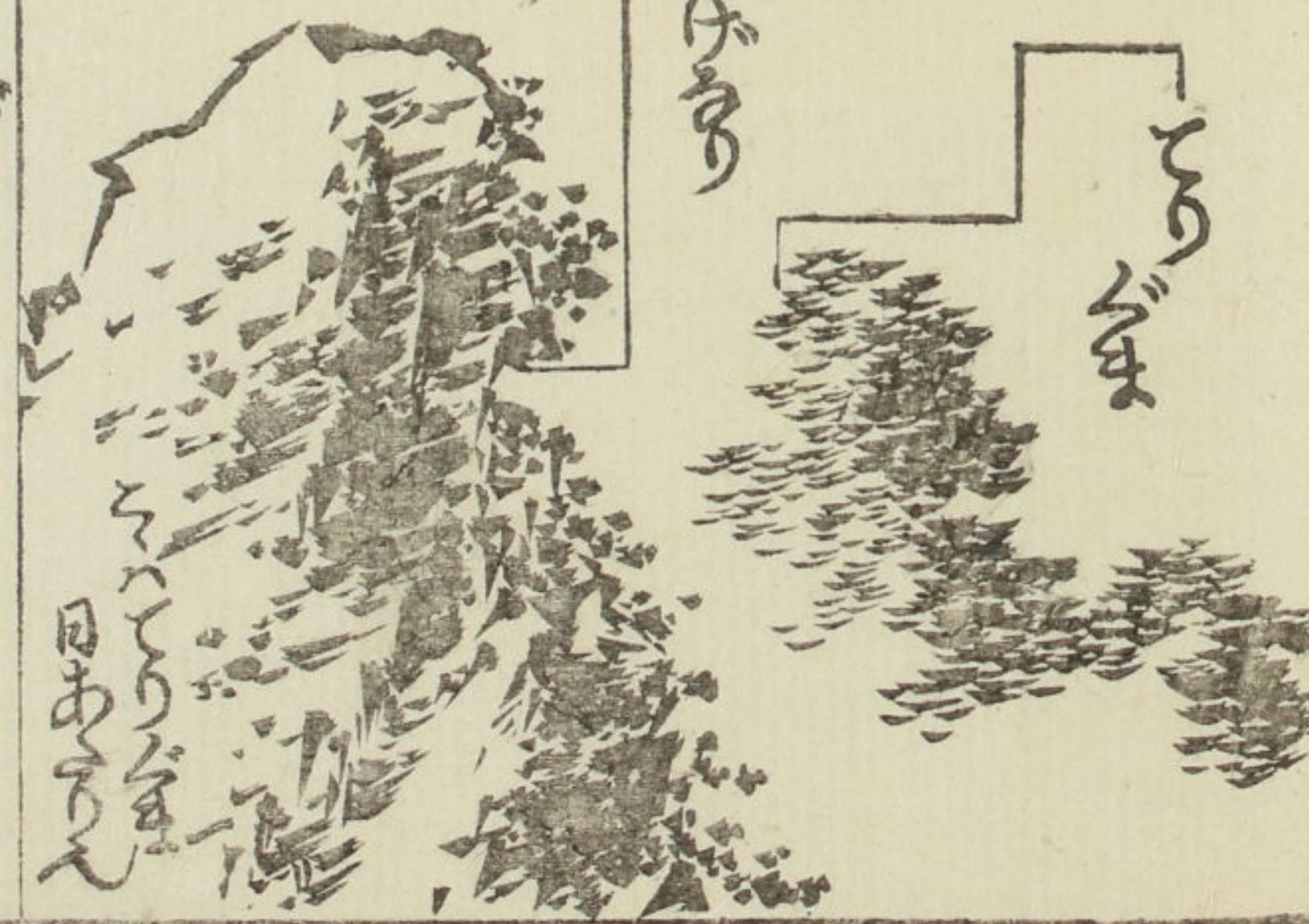
かき



○とうぶみももあわの
ちく見ふ歎りなる
石をアキルリを
タラ。がばぐあと
日うみあるとぞ圖く
アキルリとせんが
累うき。かば・もき
あくびれ。さあーに
と。りひぐづ

○とうだくふ
うけく。とうぐゑ

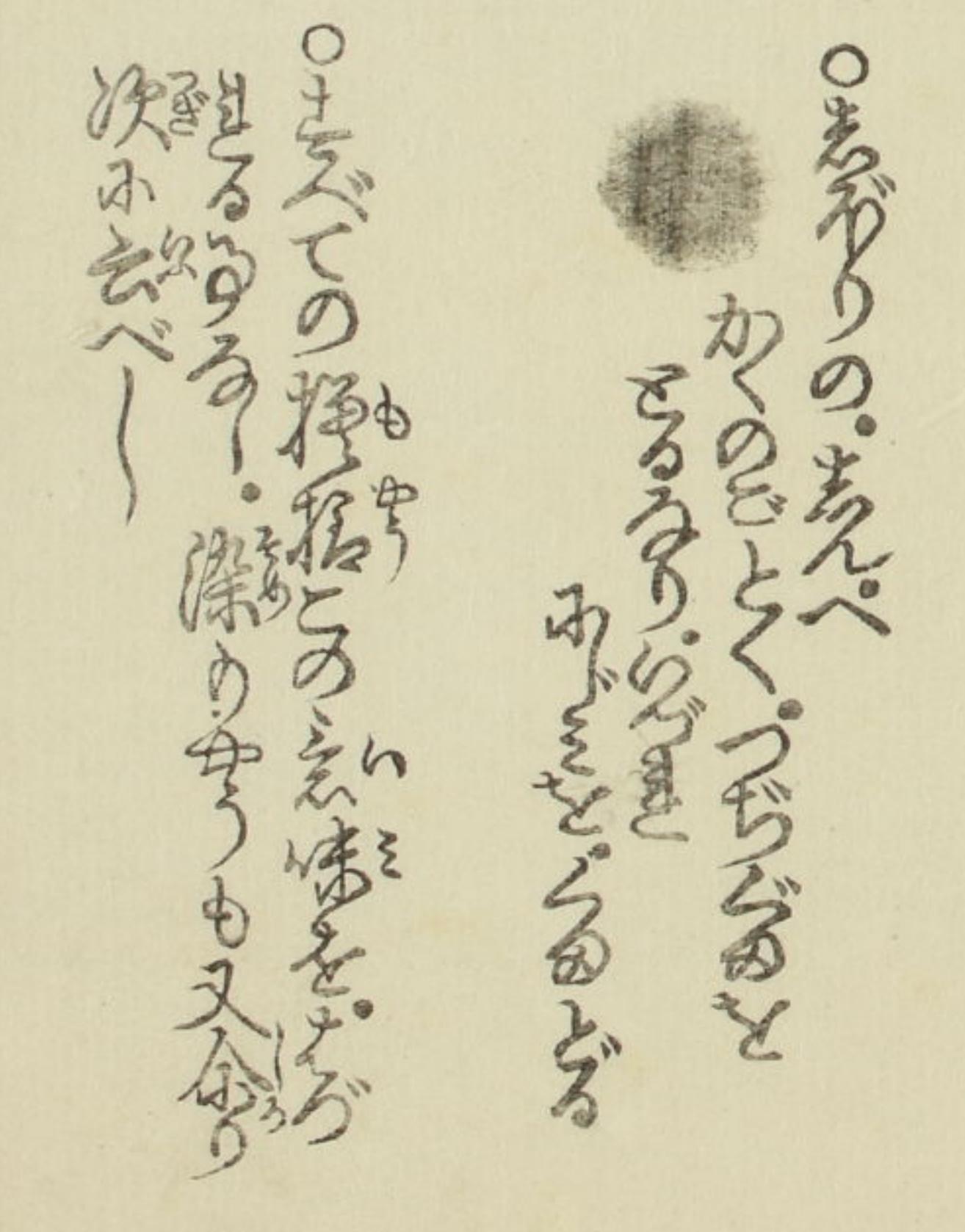
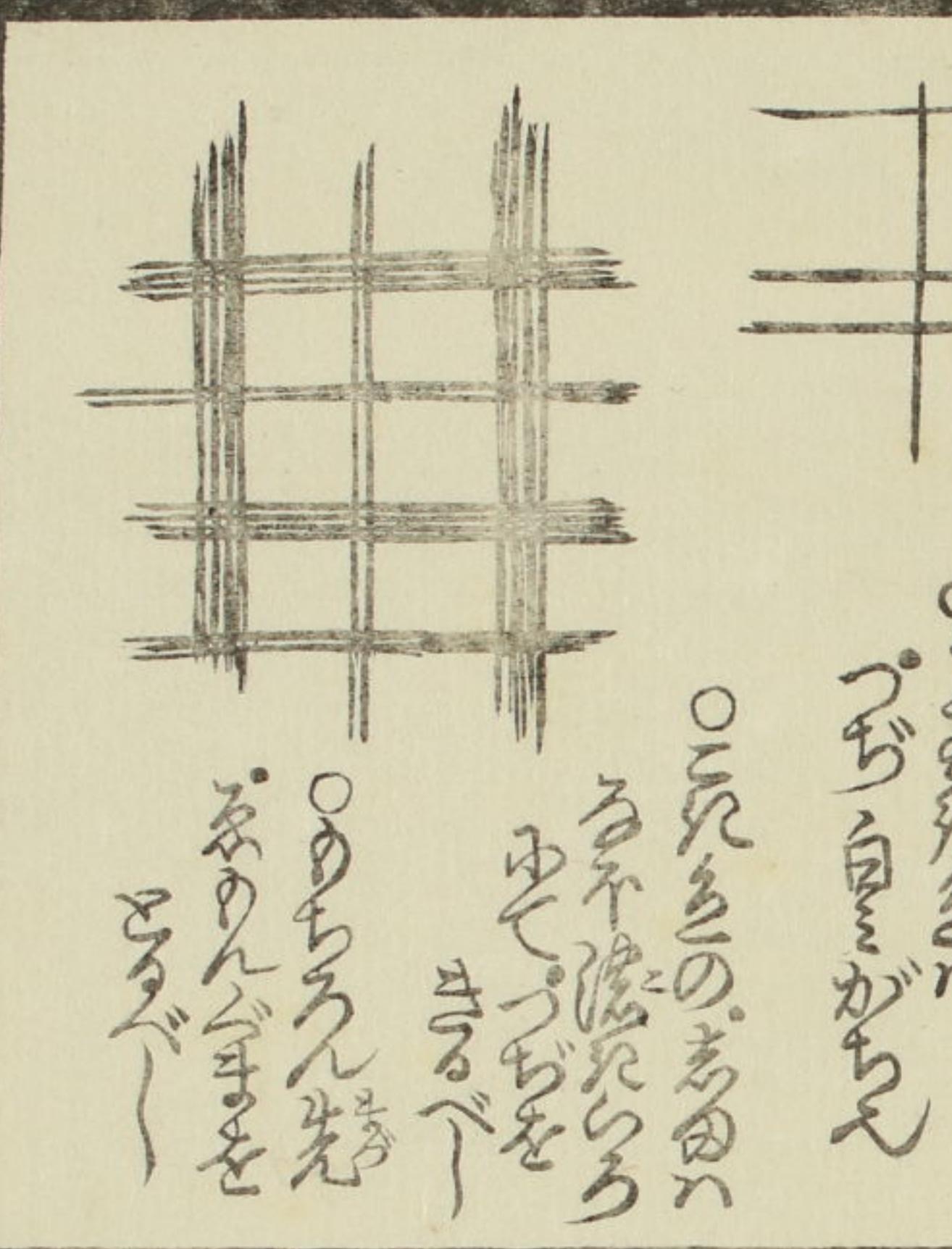
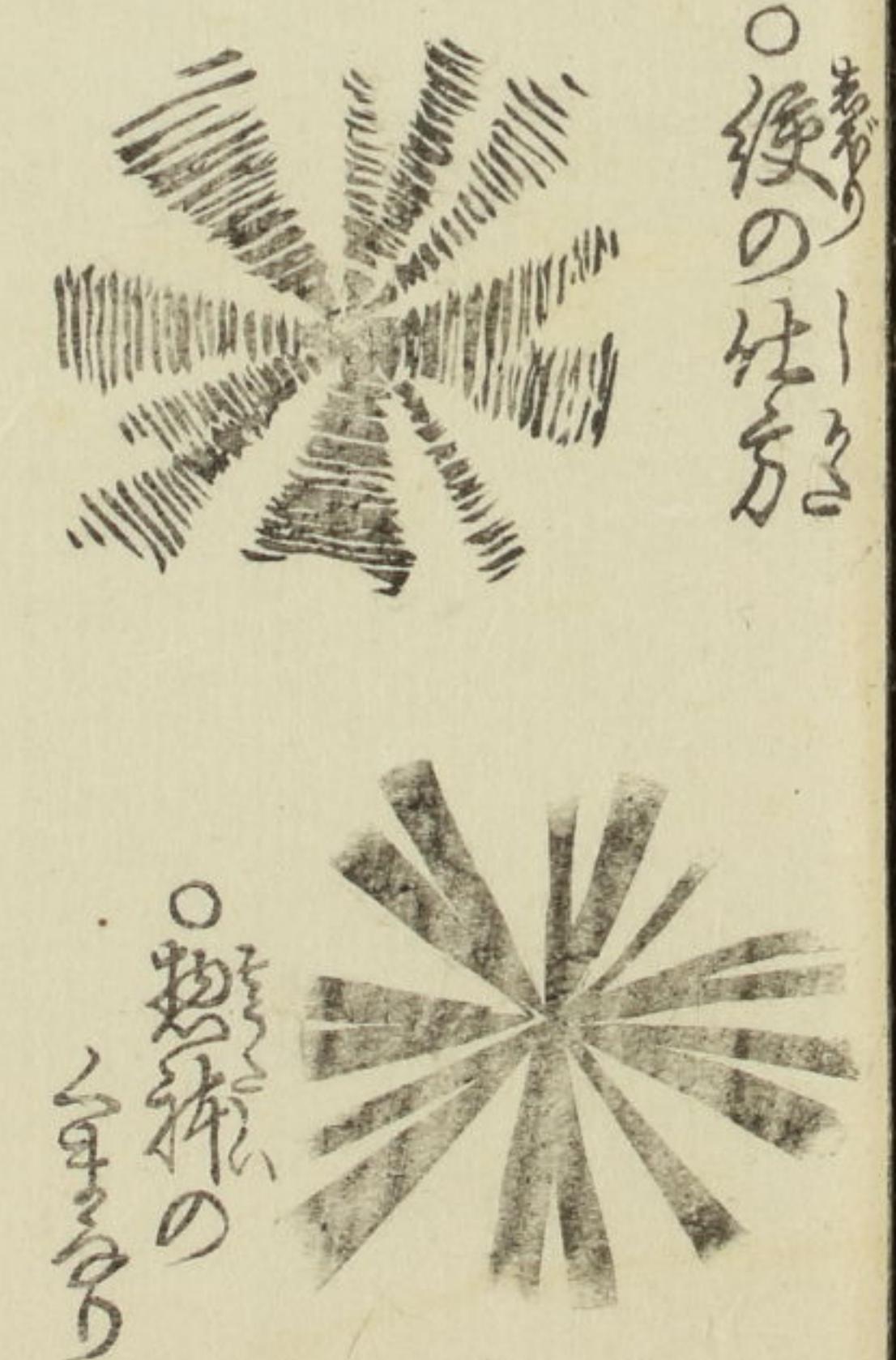
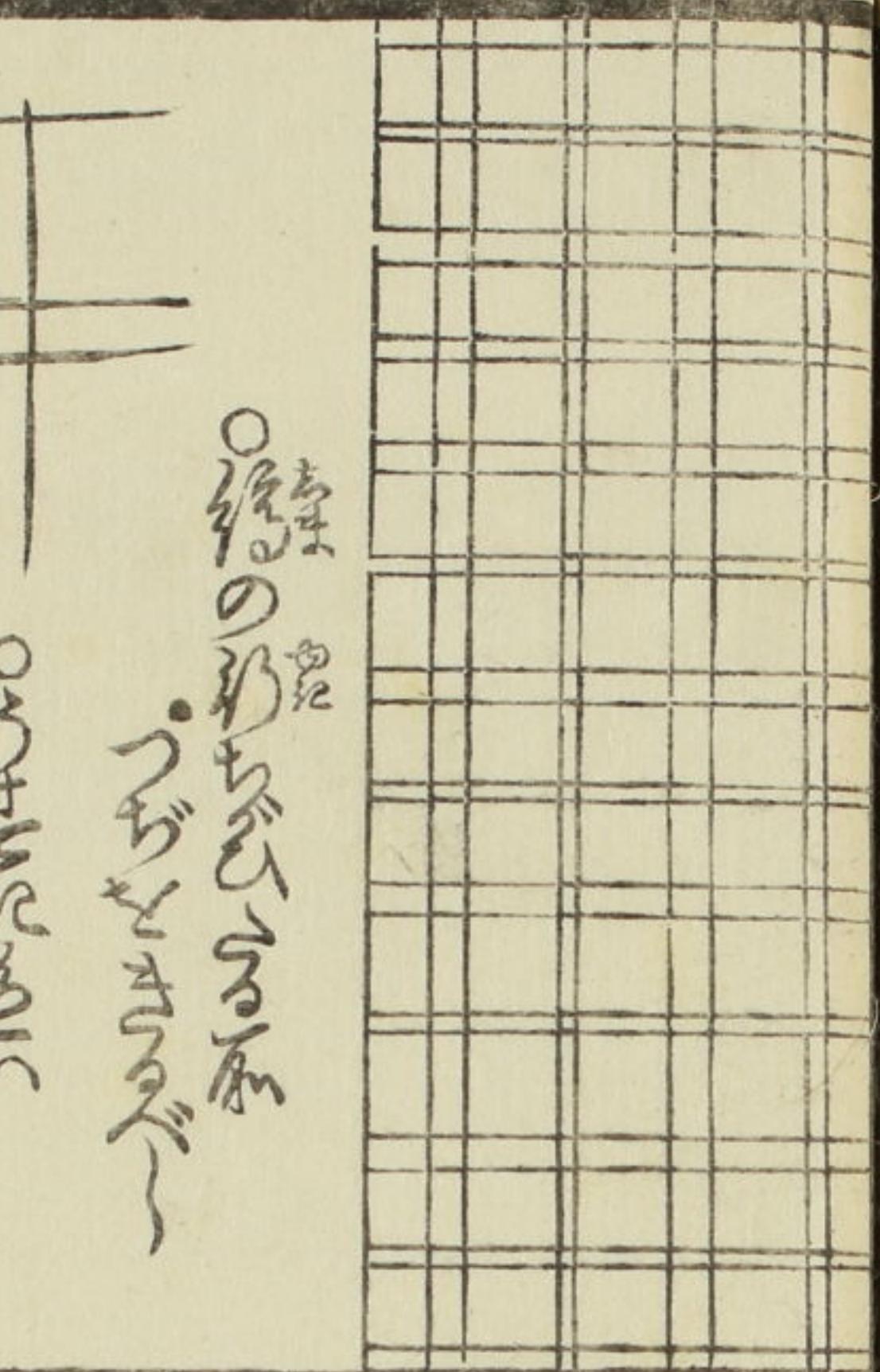
○地ねつの色より濃りうふそ。うふどう地のりうに。さくあい
絵の具を模様をかまそ。せん隈どう一輪のぐを
あめかすてえのさあふ。うふどる。ことを挿むとより



○辭言ことわざ。縞しまの表おもてをりよべー。もう隈くぼをとりて。その上うへに
縞しまの裏うしろをかくへ奉まつさる。ひそやかなる縞しまが織おりれ
ちどりの隈くぼぞりとえべ。今まで一度いちどの縞しまぞりを経たどり、経たど
の裏うしろの縞しまを藤とうを
うへす。うづぐぬき



○身みのどく。身みの上うへ
ますをとむて
とく



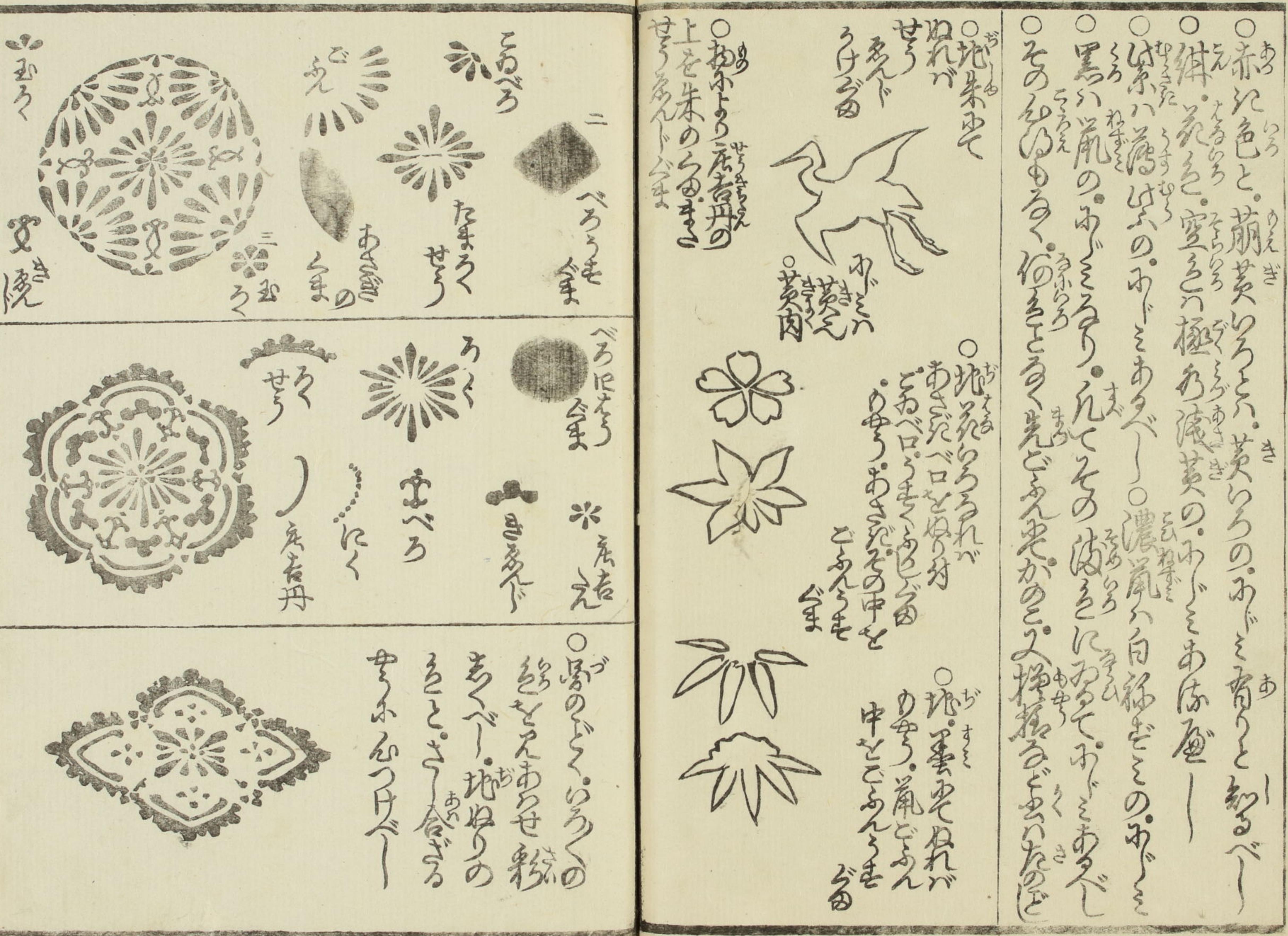
○縞しまのわらぢひふね
づびとさくべー

○うまえとひ
づび白しらと

○えきの、あゆ
ふくはくぢひふね
ゆづびを
きるべ

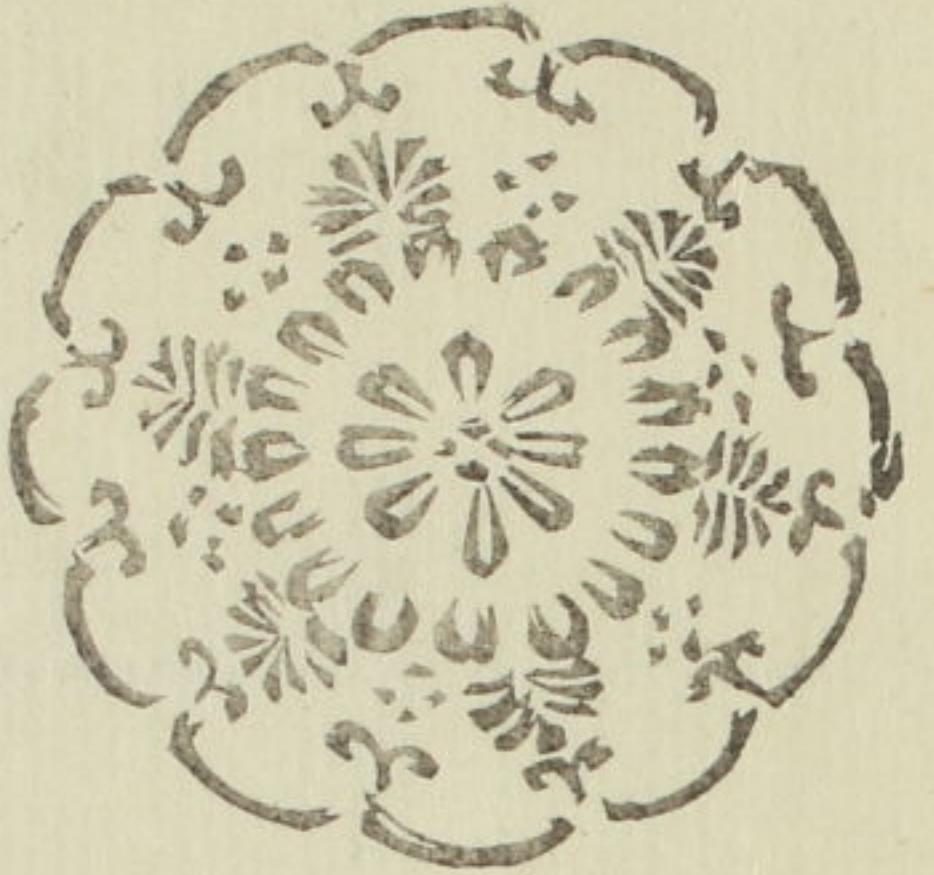
○あがりの。あんべ
かのじとく。づびと
さるす。うづき
みとくとく

○まごの。ゆめ
かのじとく。づびと
さるす。うづき
みとくとく

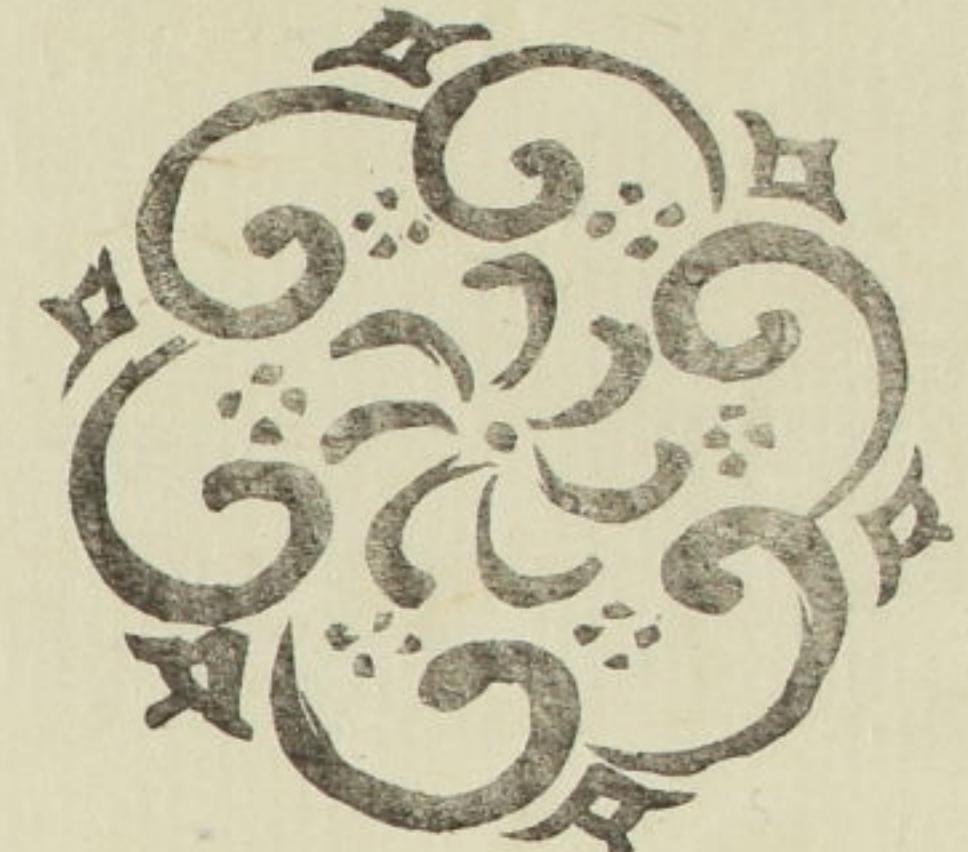




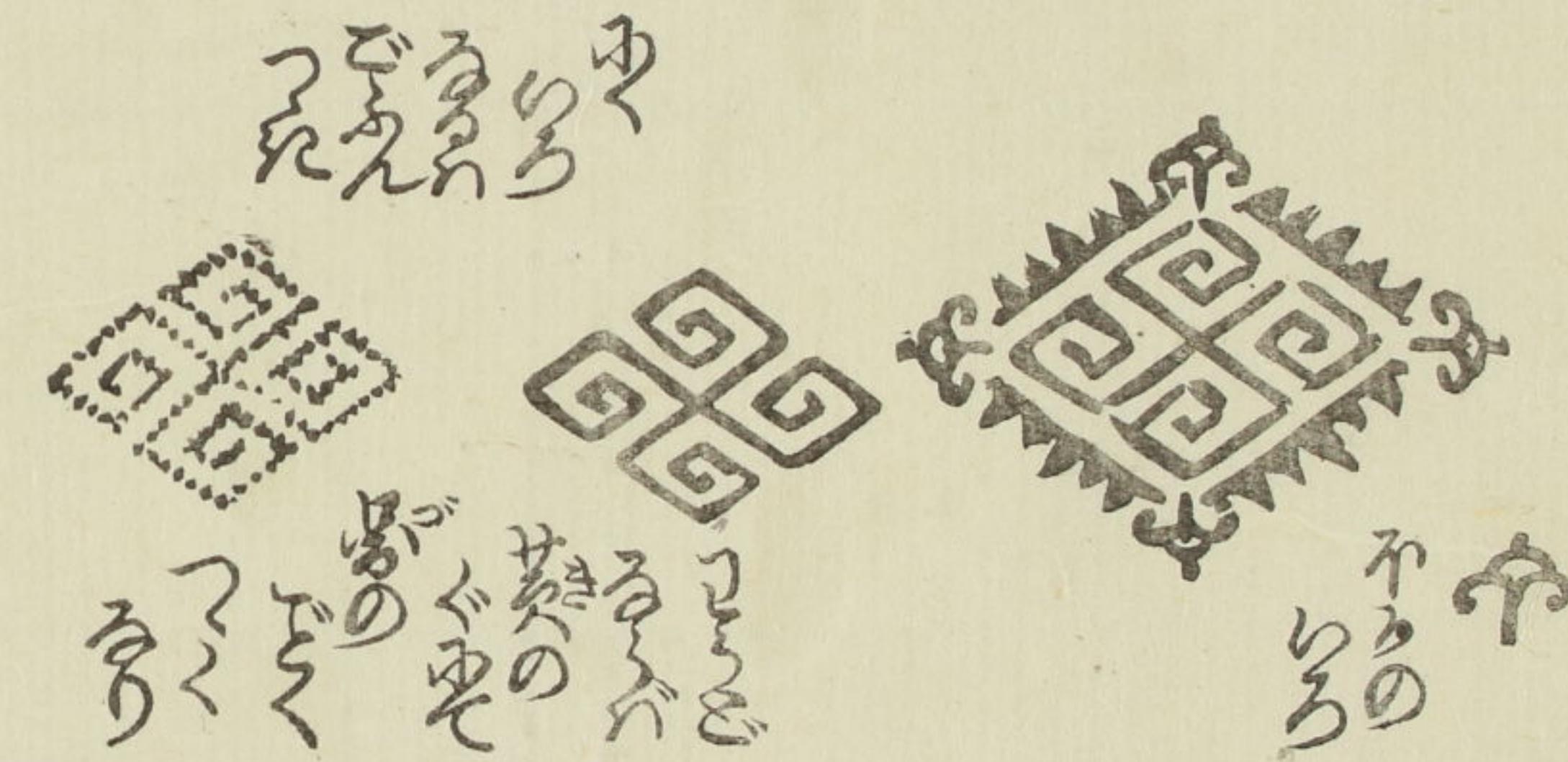
○地ねりのうふかくせん
やうのうふかくせん
上をかくせん
前のうふ
かきそめ
上を
かくせん
あぐる



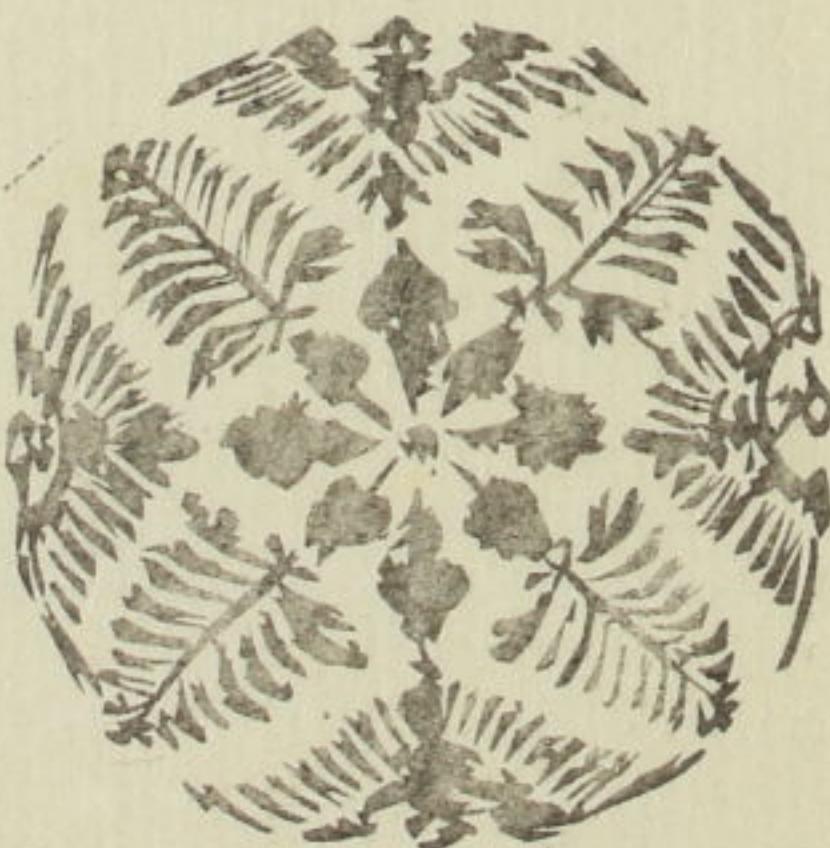
○もやうのうちを
ぢのじうとちぐて
ひがへうせんびすふ
さりたまゆ
えりんづばりうの
からつるみよ



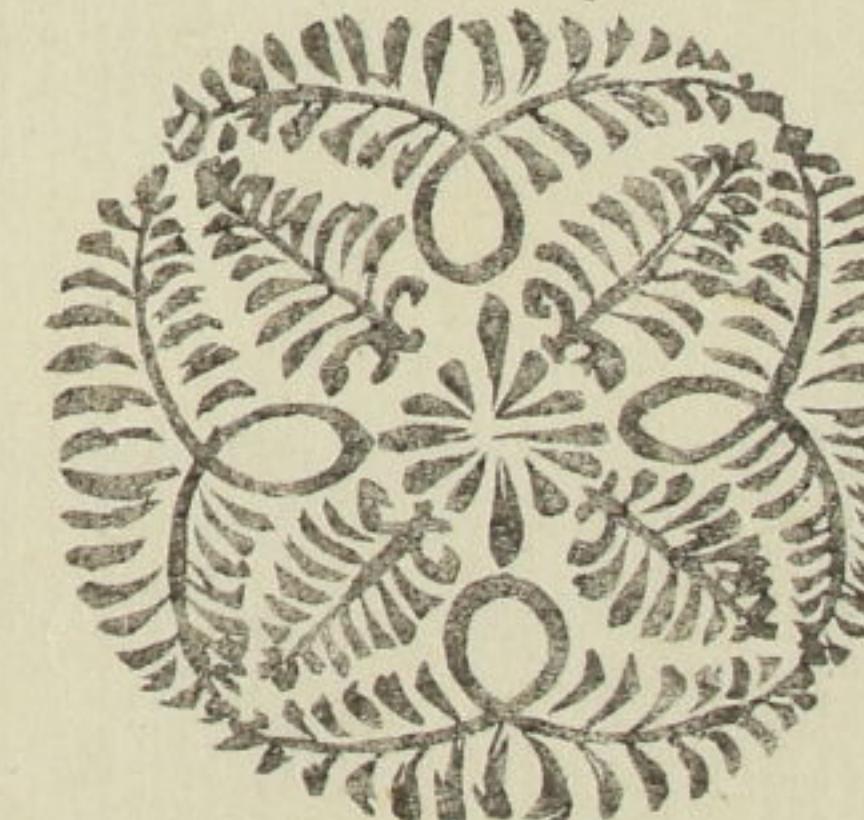
○あくわいとりくどもそれ
次第あり
○あくわい○称せんち
ごんせうまで上を
○ああうもぐま
○つうざめの上を
ゆかきのあくわい
りうて月せん



○まぐれひめゆと
ありひぐくを
がくの上へふる
くの上へむりやう
かきなる上もえへ
きむとアラゲ



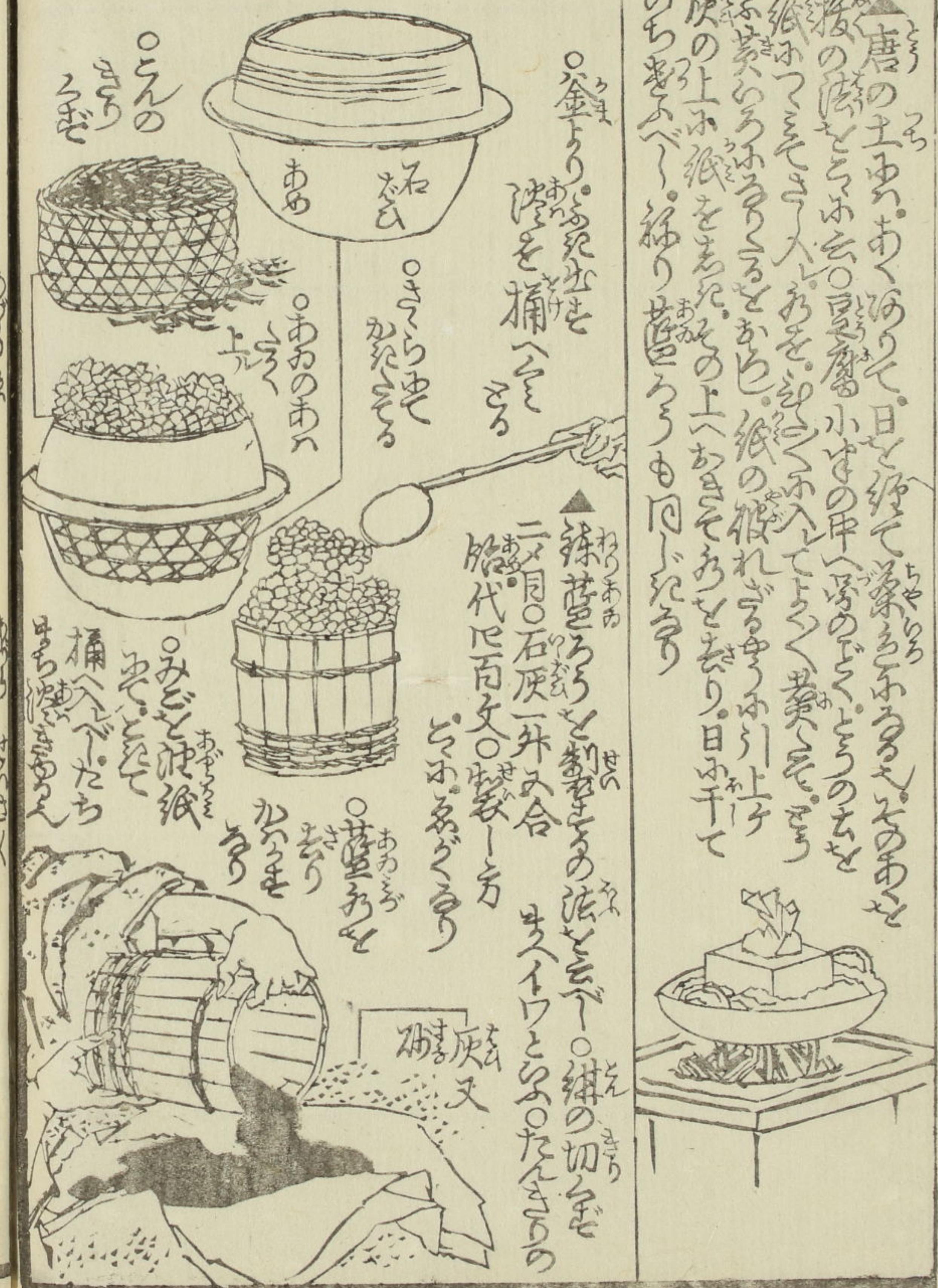
○歯の上とあんぐれを
○まめうあんドのくま
○ろくあくうの上へ
○あくわいの上へ
○ペロのうそんへ
ゆうくろをれ・頬すそ
りうて月せん



唐の土糞。あくびりて。日と煙て。葉をすくふ。もとある
紙の陰とくふ。ひのきの影。角小さの申へ。房のどく。とくのちと
紙ふて。えきり。おを。おのづかへて。よく。叢葉。ま。ま
ふ。紫らうふ。うる。と。から。紙の根れざる。ま。ま
灰の上ふ。紙をあら。その上へ。おを。おと。おと。日ふ。干して
のち。繋よべ。紹り。昔。うらゆ。口。口。口。

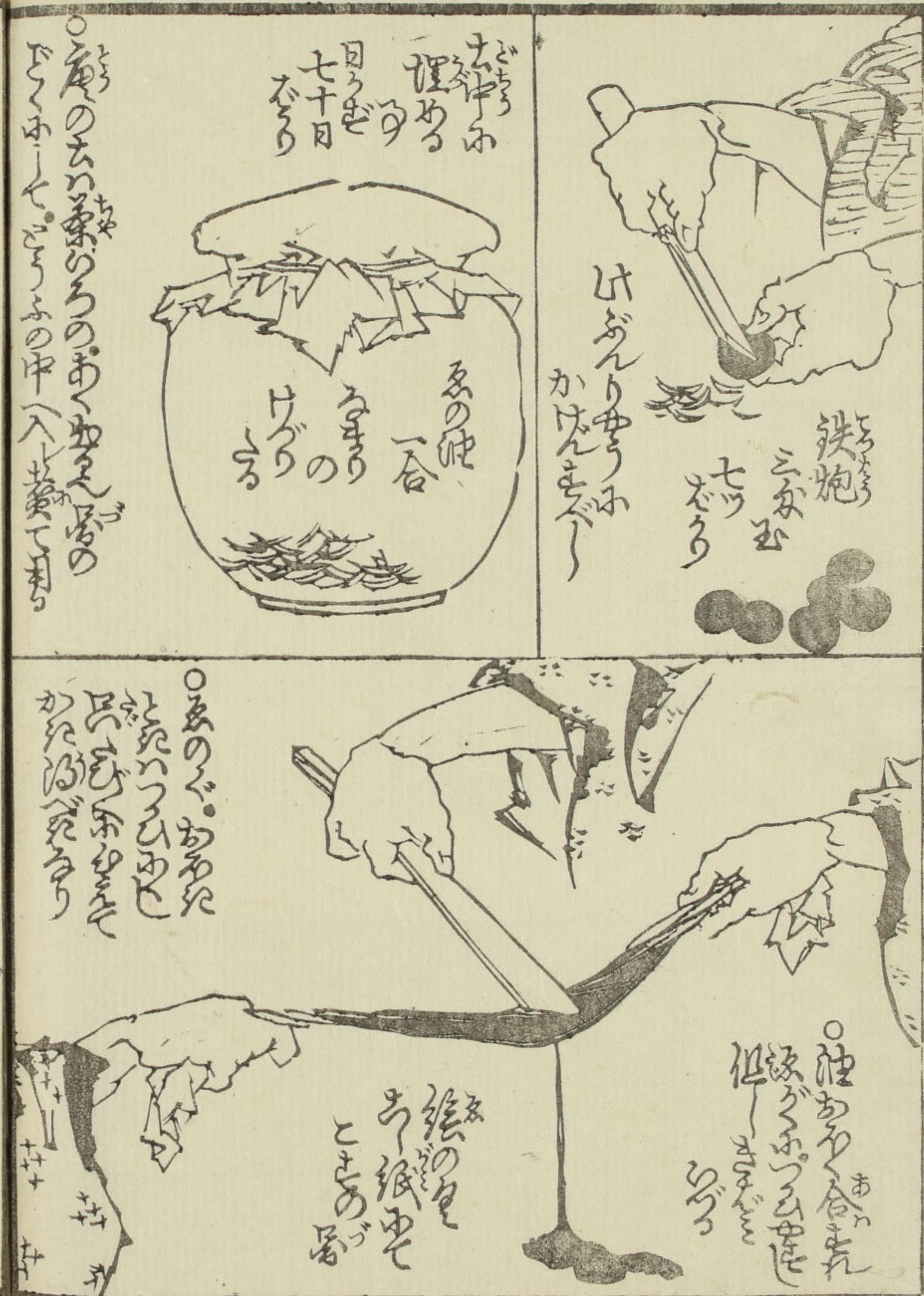
○金より。あ死ひを
酒を捕へる
△殊薦ろくと劉をもの法と
二司。石灰一升み合
胎代に百文。繫一弓
とあるがくう

ねりああ
特殊薬と割合の法と云々。緋の切をも
二司同石灰一升み合
朱イワヒムナカの
時代に百文。繫一弓
灰又



油繪あぶらゑ。筆の毛け。油あぶらの製せい作さくをひ
○筆の油あぶらを合あわせ。松まつをけづて入いれし地中ちちゅうに埋うずくまめ七十日じゅうじつほどまでそり
もつて用もちる。これ阿蘭陀あらんだの傳來伝らいあり。今紙烟草紙煙草入いれふるものもある
○みどりの油あぶら、松まつをけづて筆けをとて月つきと経へて
後あとの筆けを革かわだして生なます。且また紫しの画法がふにとび。眞重まぢゆうの
外ほかで見るもどり禽獸きんじゆ草木そうもく虫魚ちゆうぎょなどをを画かくの能のう
△油あぶら和わさとの傳伝の筆けたふ記きと。此こと向むかく。隈くまどり。こゝの法ほう
○唐とうの筆け。やわらかうべ。ころ。きつ。の筆け。あんぐ。鷹たかがら。たん
○朱しゆの色いろも多多く。墨すみのせうもん。金かなえり。アラビヤコンモ。とく用もち
入いれ用もち乃よ最さいたふあれ

○乃ち本○ア紙○漆豆也。さりとみ刷毛。大中おほなか小もこも、
○ねり板いた、ぬり金かな。諸子へ重く與よふ。あのぐへ燒明やきめう鑿石くずと入る。



○底の去り桑のうのあくねをもる
どくふと。どうふの中へレ桑て有り

ゆるあり

- 油ゑのぐへ行ひそも底の去りをすゞ入ざれば乾物あら
- 硝子へり裏より彩色をまろすあり表うちまあ画と
- 裏とり多く限ど先(とぞ)
- 史より地塗を一模様ハ竹の楊枝そか。そのう
素絵のをあきびて外の繪のぐと塗べ
- 懸ての繪れぐの中へ曉明礪と入るを残るればづくちる
- 玉盤も裏より彩色あくね勿繪。すり一度ふ色の彩
- 色あくね是もづくと流さりのをも残らむの繪の具

の中へ焼やうだんを細末して入れ。よく搗交て塗る。とたち
その塗り付くる絵の具もちることあく一度不彩色あがふす
ぬれきり凡玉盤硝子のたぐひ自然と熙のあるひの板ふ書の
生のゑの油墨彩色してよ。

○板ヨウロツバの隈どりと天朝の彩色の隈と表裏のた
びより中華技業へ共小亞細亞大洲にて繪の隈どりへ
挿絵と同ドタのセラふるきと金泥くりみどと加へ圓方
浮沈のためああうど。彼も知り是も辨へ畫く所死活る
えべあるべらひや

画李彩色通畢

繪本彩色通 初編

今此もふのまいま死酒の山川草木をばづのむ。筆のさひも
りよかずを衣服のゆき人物の肉あひよ武具る具ふ及び一さ
の道具風氣のあせり月桂の隈づうちで奉へくれ。と多くよひて
大謝の内にゆきをと見る羅絹かまと下のゆきをうしもとふ
のじがまくを筆を画さめる童のわらやかがまく成道くの
一をあつまきの筆まく便ひとして求めゆきがねき。編とづだ冊を
書ひては我半余年のも種々修めせり。も悉く傳全義。九年
歳よりの文書風を改め百才の後よりうそは道を改革せんことを
移ふともあえり。また書のたぐひをとく筆あがふたすの筆

同 同 同

二篇
三篇
四篇

前 づん みほのと あ物 まへたの まくを れる
物 あらわの 外 まく まく ぐる わが 番

繪本親子艸

初編

骨格 葛飾画量増

初編

此一軒の 師 あくへて 画の法 を あく まねむる
あせんふ形 を あく は 自立 あるを あらそ 山川 春秋
禽獸虫魚の 骨格 を あくへくき

弘化五申年正月發行

京都三條通升屋町

出雲寺文次郎

大坂心齋 橋博勞町

河内屋茂兵衛

江戸芝神明前

日本橋通二丁目

和泉屋市兵衛

湧原屋新兵衛

同 馬喰町二丁目

山口屋藤兵衛

新刻



卷之二

